

カヤツリグサ科 カヤツリグサ属

カヤツリグサ (蚊帳吊草)

Cyperus microiria Steud.

自生環境

畑地、道ばた など

原産地

日本在来

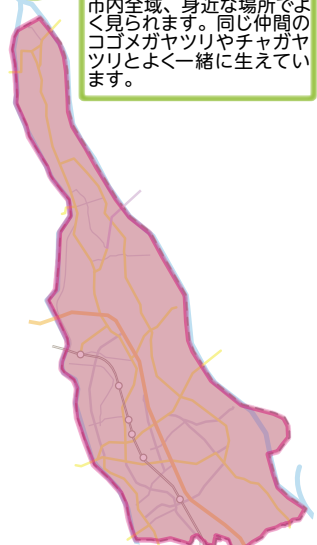
生育を脅かす要因



市内全域でよく見られますが、除草剤の影響を受けやすい傾向があります。あまり目の敵にせず、地域に育つ野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、身近な場所でもよく見られます。同じ仲間のコメガヤツリやチャガヤツリとよく一緒に生えています。



特徴

- ☆ 身近な場所によく生える1年草です。庭先や植木鉢の中に自然と芽生えてくることもあります。コメガヤツリやチャガヤツリなど、他のカヤツリグサ類とともに一緒に生えていることもしばしばです。
- ☆ 茎の先端から数本の「花序枝」が伸び、その先に黄土色の穂をつけます。遠目に見ると、まるで線香花火のように見えます。また、葉と同じような形の苞葉が、穂の下に数枚つきます。穂の鱗片は先がややとがった形をしていて、中肋と呼ばれる緑色の部分が少し突き出るのが特徴です。
- ☆ 過酷な環境下に生えたものや、秋以降に芽生えたものは、10cm以下の草丈で穂を出すこともあります。花序枝が出ないことも多く、茎の先にちょぼっと穂がつく感じになります。

相性占いで遊べる草

カヤツリ (蚊帳吊) とは、蚊帳を吊ったときの四角形を表したものです。切った茎の両端から真ん中に向かって裂いていくと、四角形ができることに由来します。これを利用した子どもの遊びが相性占いです。まず、茎の片端を持ち、相手に反対側の端を持たせて、同時に両側から裂いて、四角形ができるかで占います。実はこれ、成功率が低いので、遊びと割り切って楽しんでくださいね。

穂は線香花火のような形



中肋の先が少し突き出る



茎の先端に苞葉が何枚か出る



タネが熟すと鱗片ごと落ちて最後は軸だけになる



ウリ科 カラスウリ属

カラスウリ (烏瓜)

Trichosanthes cucumeroides (Ser.) Maxim. ex Franch. et Sav.

自生環境

林縁、やぶ など

原産地

日本在来

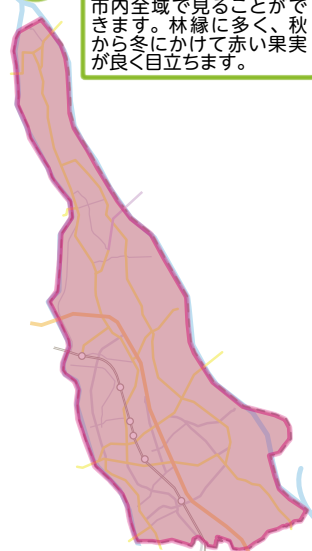
生育を脅かす要因

〔今のところ特になし〕

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域で見ることが出来ます。林縁に多く、秋から冬にかけて赤い果実が良く目立ちます。



特徴

- ☆ やぶや林の縁に絡みつくようにして生育しています。地上部は寒さとともに枯れてしましますが、地中にある塊根（かいこん）で越冬する多年草です。
- ☆ 夏の夜、白いレースのような花を多数咲かせます。花は暗くなってから開き始め、翌朝の日の出の頃にはしぼんでしまいます。ただ、季節が進んで朝晩涼しくなってくると、朝のうちは花が開いていることもあります。
- ☆ 雌雄別株で、雌株には丸い果実ができます。果実は熟すと色鮮やかな朱色になり、枯れ草の目立つ晩秋から初冬にかけての野辺でよく目立ちます。果実の中に面白い形の種子が入っています。カラスウリにはタマズサ（玉草）の別名がありますが、この種子を結び文を意味する玉草に見立てたことが由来です。

つるの先が地中に潜る

草木に絡みつくようにしながら、つるを上に向かって伸ばしていくカラスウリ。秋になると、今度は地面向かって、つるが垂れ下がるように伸びていきます。つるの先端は、地面に到達すると、土の中へと潜っていき、そこで塊根をつくります。この塊根は、翌年の春に芽を出して、新しい株として成長を始めます。カラスウリは種子のほか、このようなユニークな方法で子孫を残しています。



花は朝にはしぼむ

葉は深緑色で少しざらざらした触り心地

雄花



花の真ん中の形が違う

雌花



果実の中にはカマキリの頭のような形のタネが入っている



赤くて丸い果実がいくつもぶら下がる

マメ科 ソラマメ属

カラスノエンドウ (烏野豌豆)

Vicia sativa L. subsp. *nigra* (L.) Ehrh.

自生環境

道ばた、野原、公園 など

原産地

日本在来

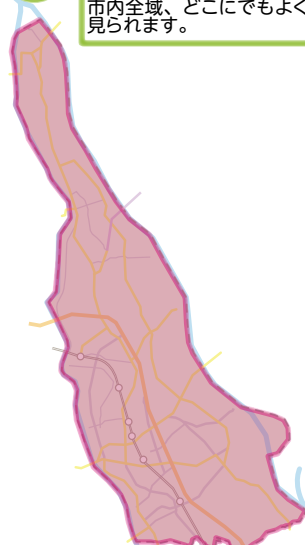
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく見られます。

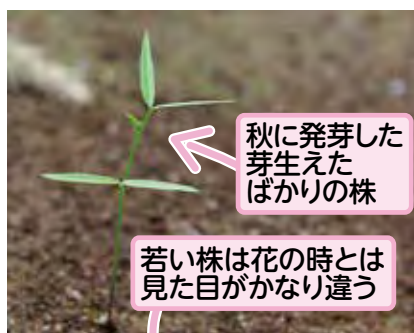


特徴

- ☆身近な場所によく生え、春の野花としておなじみの存在です。名前のカラスは、果実が熟すとカラスのように真っ黒になることに由来します。葉先が矢筈（やはず）のように凹むことから、ヤハズエンドウとも呼ばれます。
- ☆茎は 30 ～ 50cm の高さになりますが、やわらかいため自分で自分の体を支えられるほどの強さはありません。葉の一部が変形してできた巻きひげを使って、体を支えています。花は赤紫色ですが、色の濃淡には個体差があります。白花種はシロバナヤハズエンドウと呼ばれており、市内でもたまに見つかります。
- ☆葉のつけ根にある托葉には蜜腺があり、蜜を求めてアリがやってきます。また、カラスノエンドウはアブラムシがつきやすく、アブラムシを食べるためにテントウムシがたくさん集まります。アリは、アブラムシの出す甘露と言う甘い分泌物も大好きです。

ヤハズエンドウが標準名に

カラスノエンドウは、とても身近な野花なので、野草図鑑にはほぼ間違いなく掲載されています。一般向けの図鑑は、多くがカラスノエンドウの名前で紹介していますが、実は標準名としてはヤハズエンドウのほうが採用されています。そのため、専門書の大半はヤハズエンドウの名前で掲載しています。今後、一般向けの図鑑でもヤハズエンドウ派が多くなっていくかもしれませんね。



たくよう 托葉… 葉のつけ根にある、小さな葉のようなもののこと。

サトイモ科 ハンゲ属

カラスビシャク (烏柄杓)

Pinellia ternata (Thunb.) Breitenb.

自生環境

畑地、野原、道ばた など

原産地

日本在来

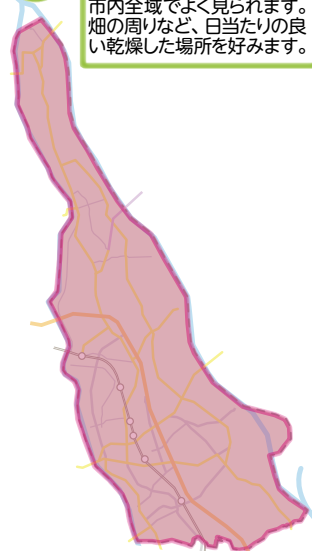
生育を脅かす要因



市内全域に生え、数も多いため、今のところ絶滅の心配はありません。ただ、生えている場所柄、除草剤散布など人間活動の影響を受けやすいと考えられます。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。畑の周りなど、日当たりの良い乾燥した場所を好みます。



特徴

- ☆ 畑地や野原など、日当たりが良くて乾燥した場所によく生えている多年草です。結実率は悪いのですが、地中の球根や、葉のつけ根と柄にできる「むかご」でどんどん増えていきます。
- ☆ 雑節のひとつの半夏生(はんげしょう)は、7月2日頃のこと、半夏(カラスビシャクのこと)の生える頃と言う意味合いがあります。ただ、7月まで待たずとも、早いものでは4～5月には葉を出し、花を咲かせ始めます。花は緑色の苞に包まれるようにして咲くため、外側からその様子をうかがうことはできません。紫がかった色の苞をつける株もあり、ムラサキハンゲと呼ばれています。
- ☆ 名前は、苞に包まれた花の形をひしゃくに見立て、小さいことからカラスが使うものとしてつけられたものです。球根は薬用として使われ、漢方で「半夏」と呼ばれています。

へそくりの語源となった草

畑の雑草として有名なカラスビシャク。さぞかし嫌われてきたのだらう…と思いきや、案外そうでもなかったようです。「半夏」という薬になるため、農家は草取りがてら球根を集めて売り、小遣い稼ぎをしたのだそうです。球根は栗のような形で、へそのようなくぼみがあるため「へそ栗」とも呼ばれます。これが農家の小遣い稼ぎに使われたことから、転じて現代の意味になったのです。



キク科 タンポポ属

カントウタンポポ (関東蒲公英)

Taraxacum platycarpum Dahlst. var. *platycarpum*

自生環境

土手、野原 など

原産地

日本在来

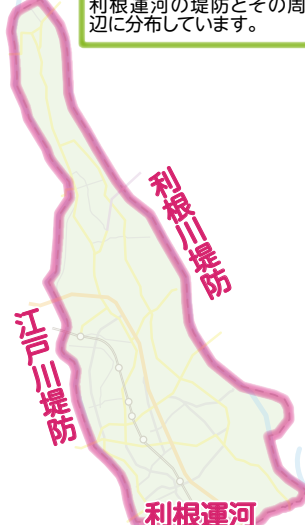
生育を脅かす要因



市内では堤防の斜面に自生しますが、近年こも外来タンポポに置き換わりつつあります。また、外来タンポポとの交雑も進んでおり、このままだと絶えてしまうかもしれません。

市内の分布状況

市内では利根川、江戸川、利根運河の堤防とその周辺に分布しています。



特徴

- ☆ ときどき草刈りが行われるような日当たりの良い野原に生える多年草です。市内では、利根川や江戸川、利根運河など堤防草地で、シナノタンポポやトウカイトンポポと一緒に生えている姿をよく見かけます。
- ☆ カントウタンポポの花期は春のみです。ただ、秋にぽかぽか陽気が続くと、返り咲きをすることもあります。花色は明るい黄色ですが、ときに白っぽい花を咲かせる株があり、ウスジロタンポポと呼ばれています。
- ☆ タンポポの仲間を見分けるポイントのひとつが総苞です。カントウタンポポの場合、総苞外片の長さは総苞全体の半分ほどで、先には角ばった突起があります。総苞外片は上を向いて総苞にぴったりとくっつきませんが、果実期には少し開くこともあります。総苞は明るい緑色です。

野田の在来タンポポ

在来タンポポは、地域によって分布する種類が異なり、カントウタンポポは関東平野を代表するものです。そのため、野田市で見られる在来タンポポもカントウタンポポが中心となります。他にも、関東北部～甲信越～北陸に分布するシナノタンポポ、関東南部～東海を中心に分布するトウカイトンポポもあります。また、国内外来種として西日本に分布するシロバナタンポポもたまに見かけます。



キク科 シオン属

カントウヨメナ (関東嫁菜)

Aster yomena (Kitam.) Honda var. *dentatus* (Kitam.) H.Hara

自生環境

野原、あぜ、水辺 など

原産地

日本在来

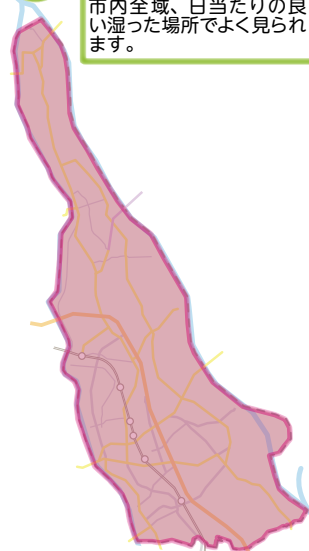
生育を脅かす要因



市内では今のところ数も多く、絶滅の心配はありませんが、身近な野の花としてやさしく見守りたいところです。生育場所の関係で、農薬の影響を受けやすいため留意が必要です。

市内の分布状況

市内全域、日当たりの良い湿った場所によく見られます。



特徴

- ☆ 田のあぜなど、日当たりの良い湿った場所によく生える身近な野菊のひとつです。地下茎を横に張り巡らせながら増えていくため、しばしば群生します。通常は草刈りなどによって草丈が30cm以下に抑えられていることが多いのですが、草むらの中などで放任に育つと1m近くになることもあります。
- ☆ 東海地方以西に分布するヨメナ (*A. yomena*) にそっくりですが、それに比べると葉の色が明るめで、質感も薄い感じがします (ヨメナの葉は厚みがある)。ヨメナ、カントウヨメナともに新芽は山菜として食べることができます。
- ☆ 夏から秋にかけ、茎の先に直径3cmほどの花を咲かせます。舌状花の色は通常薄紫色ですが、色の濃淡には個性があります。市内には舌状花の先が深く切れ込んだ「チョクザキ型」と呼ばれるタイプのものが見られることがあります。

関東地方限定の野菊

関東地方に住んでいると、カントウヨメナは最もよく見かけるなじみ深い野菊のひとつです。そのためなかなか意識しづらいのですが、実は世界的に見ると、日本の関東地方周辺だけにしか自生していない激レアな野草なのです。ヨメナの仲間は地域によって生える種類が異なっており、東海以西の西日本にはヨメナが、九州南部～沖縄にはコヨメナが生えています。



ウコギ科 キツタ属

キツタ(木蔦)

Hedera rhombea (Miq.) Bean

自生環境

山林、道ばた など

原産地

日本在来

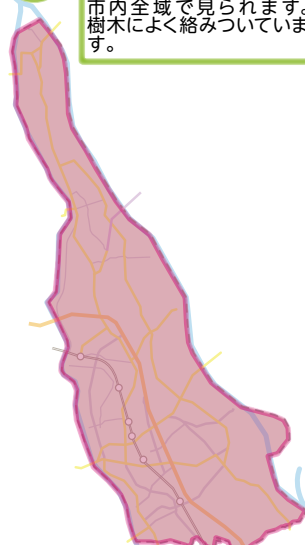
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域の樹木として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域で見られます。樹木によく絡みついています。



特徴

- ☆どこにでもよく生えるつる性の樹木です。つるはびっしりと生えた気根で、もじゃもじゃして見えます。この気根で体を支えながら、壁や幹などをよじ登っていきます。このつるは年を重ねるごとに太くなり、ときに直径5cm以上にもなります。
- ☆葉は深緑色。厚くて頑丈で、表面には光沢があります。常緑で、冬も青々としているため、フユツタとも呼ばれます。葉の形にはバリエーションがあり、同じ株の中でもいろいろな形が混じります。
- ☆秋から初冬にかけ、くすんだ黄緑色の花を咲かせます。花には独特の匂いがあり、小春日和のときはたくさんの昆虫が花を訪れます。果実は翌年の初夏に黒っぽく熟します。この果実は人間は食べられませんが、鳥には人気があるようです。

キツタは日本のアイビー

アイビーやヘデラの名前で、寄せ植えやグランドカバーなどに使われる植物は、正式にはセイヨウキツタと言います。そう、日本のキツタと同じ仲間で、ヨーロッパ原産の種類です。どちらもよく似ていますが、栽培されるセイヨウキツタは、葉に斑が入るものが多く、葉形のバリエーションも豊富です。また新しいつるをよく見ると、キツタはほぼ無毛なのに対し、セイヨウキツタは毛が多く生えています。



秋の終わりに
多数の小さな花が
丸く集まって咲く



1つの花の
直径は
1cmくらい
花びら5枚
雄しべ5本



果実は
5~6月頃に
成熟する



新しい
つる

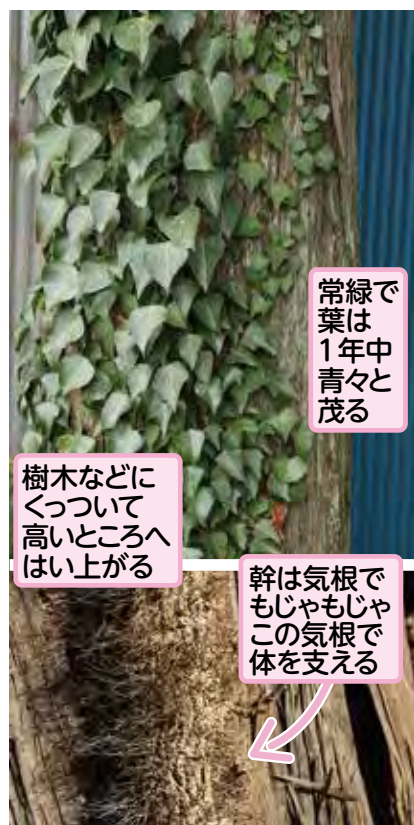
に

毛がほとんどない

毛がある

参考

セイヨウキツタ
アイビー/ヘデラ



常緑で
葉は
1年中
青々と
茂る

樹木などに
くっついて
高いところへ
はい上がる

幹は気根で
もじゃもじゃ
この気根で
体を支える

ムラサキ科 キュウリグサ属

キュウリグサ (胡瓜草)

Trigonotis peduncularis (Trevir.) F.B.Forbes et Hemsl.

自生環境

道ばた、野原、畑地 など

原産地

日本在来

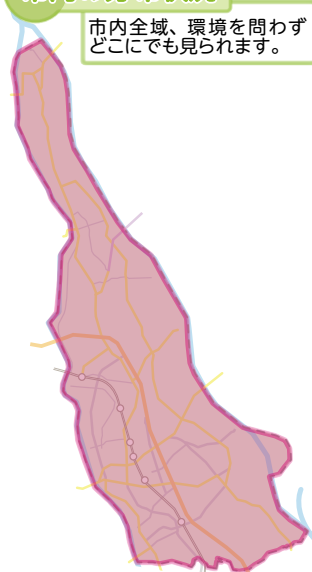
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わずどこにでも見られます。



特徴

- ☆ 身近な場所のいたるところによく見られる1～越年草です。秋に発芽し、ロゼットの状態で越冬し、春に開花結実して枯れるというサイクルを繰り返しています。
- ☆ 穂の先はくるんと巻いています。花が咲き進むにつれて巻きがほどけるようにして伸びていき、最終的には20～30cmほどの長さになります。このように巻いたような穂のつきかたを、サソリ状花序または巻散花序と言います。穂の部分には葉はありません。
- ☆ 花は直径2mm程度と小さいのですが、よく見るととても可愛らしい姿をしています。花びらは水色で、中心付近はほんのり黄色になっています。つぼみは、しばしばピンク色になります。

どこがキュウリ？

キュウリグサのキュウリ、これはあの野菜のキュウリのことです。しかし、見た感じはどこにもキュウリの要素がなく、疑問に思う人も多いかもしれませんね。では、どこがキュウリなのか…。葉を揉んで匂いを嗅ぐと、そこに答えがあります。そう、キュウリのような匂いがするのです。草むしりをしている時にふとキュウリの匂いが漂ってきたら、近くにキュウリグサがあるかもしれません。

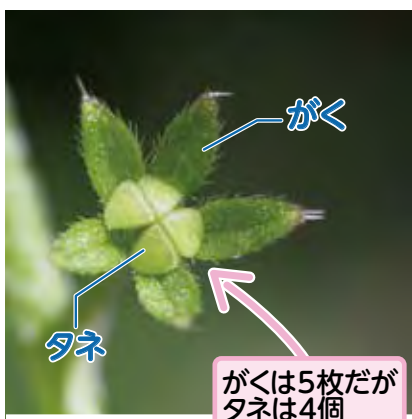


開花の初期段階では茎が短い



つぼみはピンク色

花は水色で真ん中が黄色い



がく

タネ

がくは5枚だがタネは4個



花が咲き進むとともに茎が長く伸びていく



穂の先はサソリの尾のようにくるんと巻く



葉は楕円形で1本の葉脈が目立つ

マメ科 クズ属

クズ (葛)

Pueraria lobata (Willd.) Ohwi

自生環境

道ばた、林縁、荒地地 など

原産地

日本在来

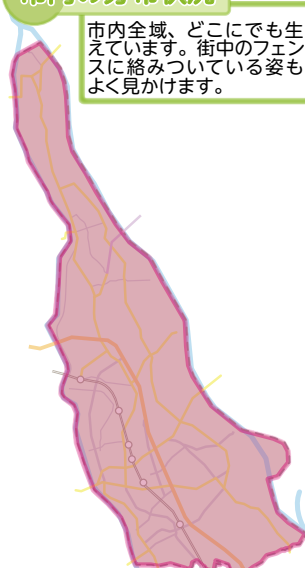
生育を脅かす要因

[今のところ特になし]

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでも生えています。街中のフェンスに絡みついている姿もよく見かけます。



特徴

- ☆ 林縁や荒地地に多く、旺盛につるを伸ばし、草木に覆いかぶさりながら成長します。冬は落葉しますが、つるは何年も枯れずに冬芽もできるため、草というよりは、フジと同じような「つる性の木」です。
- ☆ 秋に赤紫色の花が咲き、風情があるために秋の七草のひとつに選ばれています。また、根からは良質のでんぷんが採れ、くず粉として料理にも利用されます。ただ、量産ができないため、市販のくず粉の多くはイモデンプンによる代用品です。
- ☆ マントのように覆いかぶさる植物がつくる群落を「マント群落」と言います。クズのマントは人々には見た目が悪いと煙たがられますが、クツワムシなどさまざまな昆虫のすみかとして重要な役割を担っています。

海外で猛威を振るう

日本では地域の生態系の一部として、多くの生きものの生命を支えるクズ。人々の生活にも根づき、古くから秋の七草のひとつとして親しまれ、くず粉は和菓子の材料にも使われてきました。しかし、現在、クズは海外にも進出し、各国で猛烈な勢いで繁茂しています。そのすさまじさから、国際自然保護連合 (IUCN) によって「世界の侵略的外来生物ワースト100」に選定されているほどです。

中心付近に
黄色い
斑紋がある



花の穂は
上向き



葉は3枚1組

覆いかぶさるように
つるを伸ばして
クズのマントをつくる



豆のさやは
茶色くて
硬い毛が
多く生える



葉は冬に枯れるが
つるは生きている



葉が落ちた痕
水や養分を
やり取りする
管の痕跡は
まるで顔のよう



ブナ科 コナラ属

クヌギ (栲)

Quercus acutissima Carruth.

自生環境

山林、林縁 など

原産地

日本在来

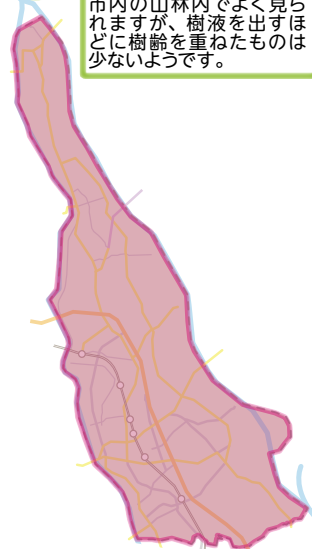
生育を脅かす要因



市内のクヌギは大半が樹齢の若い木で、樹液レストランができるほどのものは少数派です。山林そのものの開発や、大きくなる前に伐採されてしまうなどの理由が考えられます。

市内の分布状況

市内の山林内でよく見られますが、樹液を出すほどに樹齢を重ねたものは少ないようです。



特徴

- ☆ 雑木林をかたちづくる基本樹種のひとつで、特にかつての「武蔵野の雑木林」では欠かせない存在でした。人里周辺では薪としての利用が盛んで伐採が繰り返され、結果として良好な雑木林が維持されてきました。
- ☆ 樹高15mにもなる落葉高木で、樹齢を重ねると樹皮は不規則に深く割れ、かなりでこぼこした感じになります。さらに年数を重ねると、ところどころから樹液を出すようになります。樹皮は染料としても利用されます。
- ☆ 開花は4月頃。新芽の展開とともに多数の雄花の穂がぶら下がります。風媒花で、風が吹くと大量の花粉が舞いあがります。果実はいわゆる「どんぐり」ですが、成熟するのは開花したその年ではなく、翌年の秋です。

樹液に集まる虫たち

雑木林のどんぐりとして真っ先に思い浮かべるのが、コナラとクヌギでしょう。どちらも、たくさんの生きものを育む樹種で、たった1本あるだけで周辺の生物多様性は飛躍的に向上します。樹齢を重ねると、樹皮から樹液を出すようになりますが、そこにはカブトムシやクワガタ類だけでなく、多種多様な昆虫がやってきます。そのため「樹液レストラン」、「樹液酒場」とも呼ばれています。



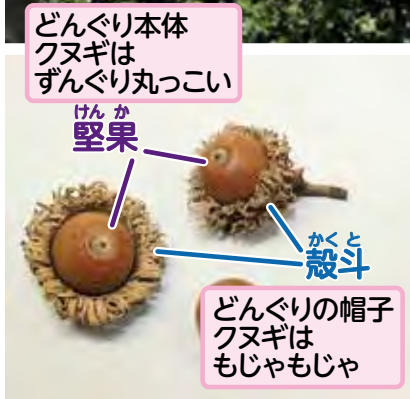
葉のギザギザは
先が針のように
突き出る



雄花の穂
風で揺れて
花粉を
空中に散らす



寒さに当たると
葉が黄色～茶色に色づく



どんぐり本体
クヌギは
ずんぐり丸っこい

堅果

殻斗

どんぐりの帽子
クヌギは
もじゃもじゃ



雌花

葉のわきに
1つずつでき
小さくて
目立たない



冬芽は
うろこ状で
毛が多い

樹皮は縦に走る
深い溝が目立つ

ニレ科 ケヤキ属

ケヤキ (櫟)

Zelkova serrata (Thunb.) Makino

自生環境

山林、道ばた、川岸 など

原産地

日本在来

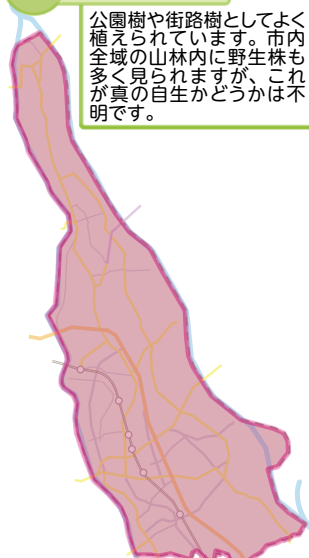
生育を脅かす要因



市内の野生株の大半は、植栽由来、つまり国内外来種としての性格が強いものです。生物多様性の観点からの保全は不要ですが、巨木は地域のシンボルとして大切にしたいですね。

市内の分布状況

公園樹や街路樹としてよく植えられています。市内全域の山林内に野生株も多く見られますが、これが真の自生かどうかは不明です。



特徴

- ☆ 本州から九州にかけての山地に自生する日本在来の樹種ですが、公園や校庭のシンボルツリーとして、また街路樹として広く植栽されています。タネから芽を出して野生化した株も多く見られます。
- ☆ 上に向かって扇を広げたような特徴的な樹形をしています。「枝の扇」があまり横に大きく広がらない品種が街路樹に利用されています。大木になると幹の樹皮がタイル状にはがれ、このすき間は小型昆虫やクモ類にとって大切な越冬の場です。
- ☆ 春、新葉の展開とともに葉のわきに小さな花を咲かせます。雌雄同株ですが雄花と雌花の別があります。果実は葉のわきにできるものの、とても小さくて目立ちません。晩秋、成熟すると枝ごと落下しますが、枯れた葉がちょうど翼の役割をして、風に乗ってひらひらと遠くまで運ばれていきます。

野田市の木です！

「けやき」は野田市の木です。第 28 回国民体育大会決定記念と郷土緑化運動の一環として、昭和 45 年 10 月 17 日に指定されました。市の花は「つつじ」で、こちらは市制施行 35 周年記念として昭和 60 年 5 月 3 日に公募によって選ばれました。ちなみに旧・関宿町の町木は「いちい」、町花は「ばたん」です。また、千葉県の木は「まき」、県の花は「なのはな」になっています。

上に向かって
扇を広げたような
樹形になる



雄花

葉のわきに
数個ずつ
集まってつく



雌花

白い部分は
雌しべの柱頭



果実は
とても小さい



葉の縁は
ギザギザしている



枝は少し
ジグザグして
見える

キク科 センダングサ属

コセンダングサ (小梅檀草)

Bidens pilosa L. var. *pilosa*

自生環境

道ばた、荒地 など

原産地

熱帯アメリカ

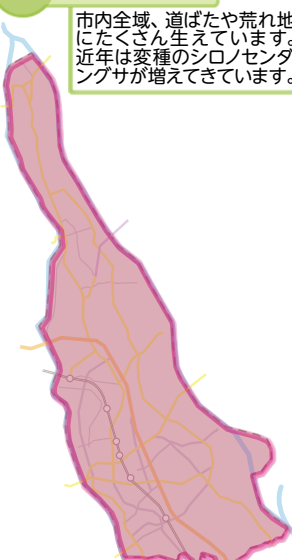
予想される被害



繁殖力がとても強く、一面を覆いつくす勢いで広がっていきます。また、果実には鋭い刺があり、アキアカネなどのトンボ類がよくこれに引っかかってしまいます。

市内の分布状況

市内全域、道ばたや荒地にたくさん生えています。近年は変種のシロノセンダングサが増えてきています。



特徴

- ☆ 世界中に広がっている草で、日本には江戸時代に渡来したと考えられています。乾燥にも強くとても丈夫な草なので、市内でもいたるところで見ることができます。1年草で通常は冬が来る前に枯れてしましますが、街中の暖かい場所では越冬していることも少なくありません。
- ☆ 小さな黄色い筒状花が多数集まり、束のようにまとまって、1つの大きな花のように見えます。コセンダングサの花は筒状花のみで舌状花（1枚の花びらのような花）はありません。
- ☆ タネは細長い形をしており、先に鋭い刺が2～3本あります。この刺で動物の毛や服に刺さり、「ひつつき虫」となります。冬の初め頃、強い冷え込みがあると、茎の中の水分が凍って皮を突き破り、白く薄い氷となって外に出てくることがあります。

花の個性いろいろ

コセンダングサの花の外側に、白い舌状花（1枚の花びらのような花）が出る株があり、これをシロノセンダングサと言います。また、舌状花になりかけたような白い花がつく株をアイノコセンダングサと呼ぶことがあります。さらに舌状花の長さが1.5cm以上ととても大きい、タチアワユキセンダングサという南方系の変種もあります。タチアワユキセンダングサは、今のところ市内にはありません。



ミズアオイ科 ミズアオイ属

コナギ(小水葱)

Monochoria vaginalis (Burm.f.) C.Presl ex Kunth

自生環境

水田、湿地 など

原産地

日本在来

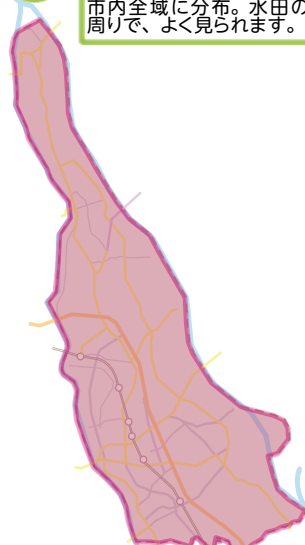
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に育つ野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域に分布。水田の周りで、よく見られます。



特徴

☆ 水田とその周辺の湿った場所にたくさん生える1年草です。水田地帯ではありふれた草ですが、それ以外の環境にはあまり見られません。古くはナギ(水葱)とも呼ばれていました。

☆ ホテイアオイと同じ仲間ですが、ホテイアオイのように水面に漂うのではなく、水底に根を下ろしそこから葉を出します。水の深さに応じて、体の形は大きく変化します。水がなくとも生育可能ですが、土がひどく乾燥すると弱ってしまいます。

☆ 花は秋に咲きます。その日の気温によって異なりますが、通常は午前中のうちにしぼんでしまいます。直径は2cmあるかどうかと小さいのですが、鮮やかな青紫色でよく目立ちます。同じ仲間のミズアオイは葉の上に花の穂を出すのに対し、コナギの花は葉よりも低い位置につきます。

古くは野菜として…

ミズアオイ科ミズアオイ属に分類されるコナギとミズアオイ。古くはどちらもナギ(水葱)と呼び、水田に生える食べられる草として大切にされてきました。今やコナギははびこる雑草として目の敵にされ、一方のミズアオイは環境悪化から希少種となり、別の意味で大切にされています。コナギとミズアオイの立ち位置の変化は、私たち人間と自然の関わりかたを考えさせられるような気がします。



花びらは6枚

花は午前中でしぼんでしまうことが多い



花は葉よりも下につく



果実期の様子
タネができると
枯れてしまう

細かいタネが
中にびっしりと
詰まっている



水の深さによって
葉の形が大きく変わる



ブナ科 コナラ属

コナラ (小櫓)

Quercus serrata Murray

自生環境

山林

原産地

日本在来

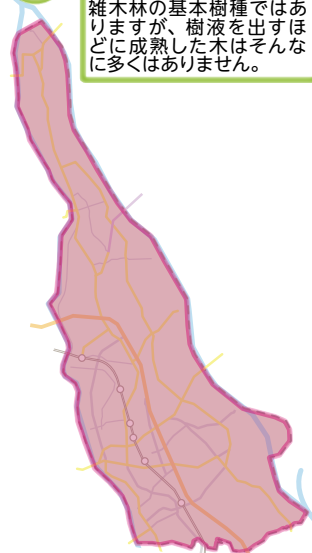
生育を脅かす要因



市内のコナラは大半が樹齢の若い木で、虫が集まる樹液レストランができるほどのものは少数派です。山林そのものの開発や、大きくなる前に伐採されてしまうなどの理由が考えられます。

市内の分布状況

雑木林の基本樹種ではありますが、樹液を出すほどに成熟した木はそんなに多くはありません。



特徴

- ☆ クヌギとともに、平地の雑木林を構成する基本樹種のひとつです。樹高が 20m にもなる落葉高木で、落ち葉は豊かな土をつくるもととなり、樹皮から出る樹液が多くの虫の命を支えています。また、良質の薪となり人々の暮らしを支えてきました。
- ☆ 花期は春で、新しい葉の展開と同時に開花します。雌雄同株ですが、花は雄花と雌花に分かれます。そのうち、遠目からでもよく目立つのが雄花の穂。穂は垂れ下がり、わずかな風でもよく揺れて花粉を大量に飛ばします。一方の雌花は枝先の葉のわきにつきますが、とても小さくて観察にはルーペが必要です。
- ☆ 果実は、いわゆるどんぐりです。開花したその年の秋に実る「1 年型」で、帽子の部分にはうろこのような模様があります。どんぐりは、立派なタネですので、土の上に落ちると発芽します。ただ、乾燥すると発芽率は極端に悪くなります。

人々の暮らしを支えた

薪が生活必需品だった時代、人と雑木林は持ちつ持たれつの関係でした。人は雑木林の中から、必要な分だけ伐採。その後、芽吹きが起こって、木は再生します。これを繰り返すことで木々は順次更新され、全体として良好な雑木林が維持されました。これを「萌芽更新（ほうがこうしん）」と言います。薪が使われなくなった現代、雑木林は放置され、荒れたり、宅地化されたりして危機的状況にあります。

春に咲いた雌花はその年の秋にどんぐりとなる



うろこのような模様がある



殻斗がと

どんぐり
の
堅果

細長くて
こげ茶色

新しい葉のわきにつくが
とても小さい



雌花



雄花

雄花は
風と
ともに
花粉を
飛ばす

樹皮は
不規則な
縦の模様
がある



寒くなると
葉は紅葉する



土に落ちた
どんぐりは
やがて芽を出す



トウダイグサ科 ニシキソウ属

コニシキソウ (小錦草)

Chamaesyce maculata (L.) Small

自生環境

道ばた、畑地、公園 など

原産地

北アメリカ

予想される被害



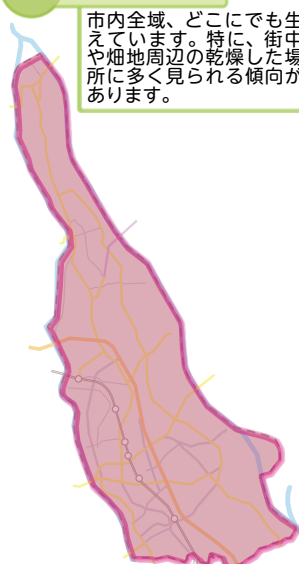
同じ仲間に日本在来種のニシキソウがありますが、コニシキソウに生育場所を奪われ、激減しました。また、畑地で旺盛に繁殖するため、農作物への影響も懸念されます。

特徴

- ☆ アスファルトのすき間や、土がむき出しになっているような場所で、地面をはうように伸びていく小さな草です。特に、畑地に多く見られる傾向があります。成長がとても早く、発芽から10日もすれば、開花・結実するようになります。
- ☆ 茎をちぎると白い汁が出てきます。子どもたちの間では「トンボミルク」等と言い、これをトンボに飲ませる遊びがあります。ただ、特にトンボがこの汁を好むというわけではないようです。
- ☆ 葉の中心には、黒い線のような模様が入ります。花や果実は葉わきにつきますが、いずれもとても小さいため、観察するには虫眼鏡などの道具が必要です。果実は表面全体に白い毛が生えていますが、この毛の生えかたは類似種との重要な区別点になります。

市内の分布状況

市内全域、どこにでも生えています。特に、街中や畑地周辺の乾燥した場所に多く見られる傾向があります。



小さな畑地雑草

畑地には、コニシキソウのほかにスベリヒユ、トキンソウ、ゴウシュウアリタソウ、トキワハゼ、ニワホコリ、コスズメガヤ、ハキダメギクなどの比較的小さな草を見ることができます。これらの草の多くは、いずれも発芽から短期間で開花・結実し、数ヶ月程度で寿命が尽きます。畑はいつ耕されたり除草されるか分からないため、こつとやっとうまく人の作業のすき間をぬって世代交代を行っているのです。



ナデシコ科 ハコベ属

コハコベ (小繁縷)

Stellaria media (L.) Vill.

自生環境

道ばた、畑地、野原 など

原産地

ヨーロッパ

予想される被害

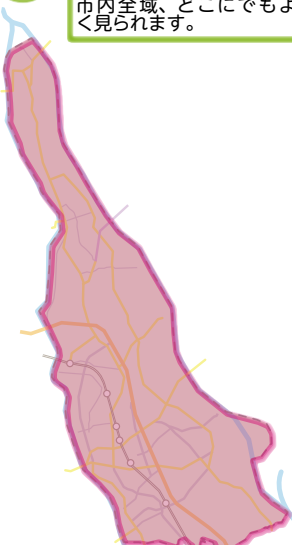
駆逐

交雑

とても丈夫で繁殖力も強力です。また、在来種のミドリハコベとの判別に悩むような、中間的な姿の株もしばしば見られます。ミドリハコベとの間で交雑が起きている可能性があります。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく見られます。



特徴

- ☆ 一般に「はこべ」と呼ばれているものは、ミドリハコベとコハコベ（本種）の2種があります。国内で最初にコハコベの存在が気づかれたのは1922年の東京でのことで、以降急速に全国へと広がり、今では身近な「はこべ」の大半がこのコハコベです。
- ☆ 環境を問わずどこにでも生えますが、特に日当たりの良い場所を好みます。1年草ですが季節に関係なく出現し、年中開花・結実を繰り返しています。花は、日が当たるといっせいに開きます。花びらは白色で5枚ありますが、気温の高い時期は花びらを省略した状態で開くこともあります。
- ☆ ミドリハコベとコハコベはよく似ているうえに、生える環境によって見た目が大きく変化するため、その見分けは容易ではありません。タネが確実な識別点となりますが、食用にする場合は、どちらも食べられるため、区別しなくても問題はありません。

小鳥が大好きな草

日本で「はこべ」と言えば、春の七草のひとつ。葉物野菜の少ない冬場の貴重な青菜として重宝されてきました。また、摘んだハコベを炒り、塩と混ぜたものは「ハコベ塩」と言って、歯磨き粉として使われました。ヨーロッパでも野菜として使われますが、一方でニワトリや小鳥が好んで食べる草として知られています。そのことから英語ではchick weed（ヒヨコの草）と言います。

茎は赤みを帯びることが多い

花びらは白色でVの字の形

雌しべの柱頭は3つに分かれる

柱頭
ちゅうとう

雄しべの本数は少ない

雄しべ

果実は熟すと皮が5つに開く



タネの表面は多少ブツブツして見えるがミドリハコベのようなトゲトゲにはならない

真冬でも葉は青々としている

葉は卵形で先がツンととがる

イネ科 ジュズダマ属

ジュズダマ (数珠玉)

Coix lacryma-jobi L.

自生環境

水辺、荒地地 など

原産地

熱帯アジア

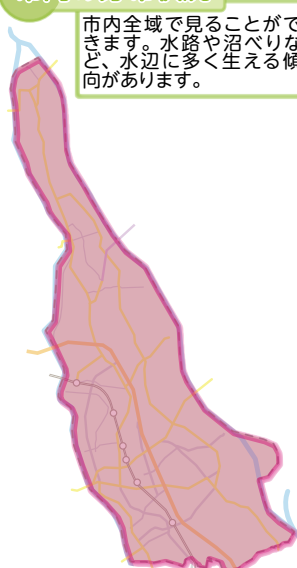
予想される被害



古い時代に定着した外来種で、水辺の生態系の一員として落ち着いています。生態系に悪さをする可能性は低いのですが、風媒花なのでイネ科花粉症の人は要注意です。

市内の分布状況

市内全域で見ることが出来ます。水路や沼べりな傾向があります。



特徴

- ☆ 古い時代に熱帯地方より渡来したと考えられる多年草です。普通の草地にも生えますが、水辺を好む傾向があります。市内でも池の縁や水路際などによく生えています。
- ☆ 花のない時期は、やせたトウモロコシのような姿をしています。草丈は0.5～1mくらいになり、夏から秋にかけて、茎の先に花の穂をつけます。1つの穂に雄花と雌花があり、雌花の先に雄花の穂がつきます。雌花は苞鞘と呼ばれる壺のようなものに包まれ、そこから2本の柱頭が出します。
- ☆ 果実期になると苞鞘は石のように硬くなり、表面に光沢が出てきます。これは長持ちするため、数珠やネックレス、お手玉の中身などに使われます。果実はしずく形なので、英語では、これを旧約聖書のヨブ (Job) の涙に見立て、Job's tears と言います。

ハトムギも同じ仲間

健康茶の原料としてもおなじみのハトムギは、ジュズダマの変種です。野田市ではほとんど栽培されていませんが、近隣では栃木県小山市が有名な産地となっています。ハトムギはタネを包む苞鞘がジュズダマに比べると小さく、指で比較的簡単に割ることができます。原産地の東南アジアでは、雑穀として食用にするほか、苞鞘の中身はヨクイニンと呼ばれ、薬に利用されています。



ヤシ科 シュロ属

シュロ (棕櫚)

Trachycarpus fortunei (Hook.) H.Wendl.

総合対策
(その他)

自生環境

山林、神社 など

原産地

日本 (九州以南) ～中国

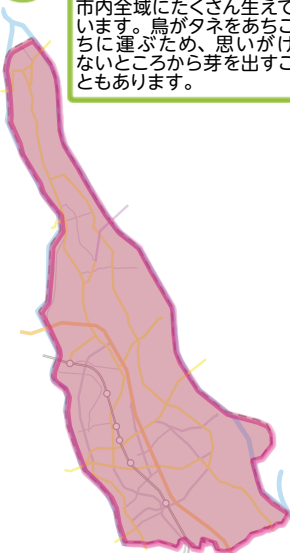
予想される被害

駆逐

野田市市内で見られるものは、人が植えたものが野生化して広がったものです。他の在来樹木との間で、場所をめぐる競争が起こる可能性があります。

市内の分布状況

市内全域にたくさん生えています。鳥がタネをあちこちに運ぶため、思いがけないところから芽を出すこともあります。



特徴

- ★ 熱帯の樹木でおなじみのヤシの仲間ですが、比較的寒さに強い部類に入ります。国内では九州より南の地域に自生します。それとは別に、寒冷地以外の広域で野生株が見られますが、これらは栽培からの逃げ出しと考えられます。
- ★ 葉はうちわのような形で大きいものでは直径 50cm 以上になります。まるでうちわの骨のように細く切れ込み、葉先は折れて垂れる傾向があります。縁に鋭い刺があるため、工作に使うときは手を切らないように注意してください。
- ★ 雄株と雌株があります。どちらも初夏になると、幹の先端部から薄い黄色の花の穂が垂れます。雌株は、秋になると丸い果実が青っぽい灰色に熟します。この果実は鳥に人気があるようで、鳥によって運ばれたタネがあちこちから芽を出しています。

生活用品や工芸品の素材に

シュロは食用にはなりません、生活用品や工芸品をつくるための素材として、活用されてきました。材木は鐘をつくための撞木（しゅもく）と呼ばれる棒になります。幹の表面を覆う硬い繊維状のものは、葉の根元が変化したのですが、強度があるため縄やほうきをつくるのに使われます。それから、葉を切ったり編んだりすると、さまざまな工作を楽しむことができます。



ブナ科 コナラ属

シラカシ (白櫟)

Quercus myrsinifolia Blume

自生環境

山林、社寺林 など

原産地

日本在来

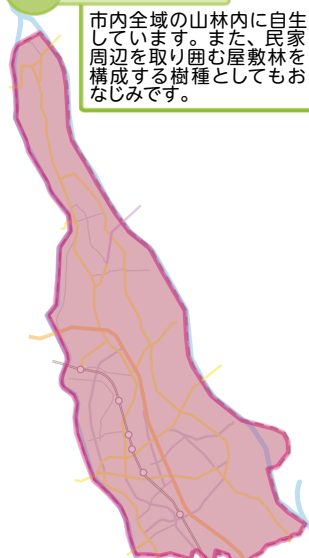
生育を脅かす要因



今のところ絶滅の心配はなく、特別な保全も不要です。ただ、うっそうと茂る大木なので目の敵にされがちです。緑を育む「地域の木」として大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域の山林内に自生しています。また、民家周辺を取り囲む屋敷林を構成する樹種としてもおなじみです。



特徴

- ☆ 一般に「櫟（カシ）の木」と呼ばれており、どんぐりがなる木のひとつです。市内では最も多く見られるどんぐりのひとつで、うっそうとした山林を形づくり、社寺林や屋敷林を構成する樹種としても重要です。シラカシは常緑樹なので、夏の酷暑や冬の寒風を緩和するはたらきがあります。
- ☆ 花は4～5月頃に咲きます。雌雄同株ですが、雄花と雌花に分かれています。雄花は穂になって垂れ下がり、樹冠いっぱいに咲いて目立ちます。
- ☆ どんぐりは紡錘形で光沢があり、成熟するとこげ茶色になります。帽子は横から見るとしま模様になっています。

樹液を出す木

シラカシは大木になると樹皮から樹液を出すようになります。この樹液には、カブトムシやノコギリクワガタなどの樹液を好む昆虫が多数集まってきます。市内ではシラカシのほかに、コナラやクヌギ、マルバヤナギなどの樹種が大木になると樹皮から樹液を出して、同様に樹液を好む昆虫たちが集まります。ただ、最近は伐採されてしまうことが多く、樹液を出すような大木は激減してしまいました。



雄花は穂になって垂れ下がる

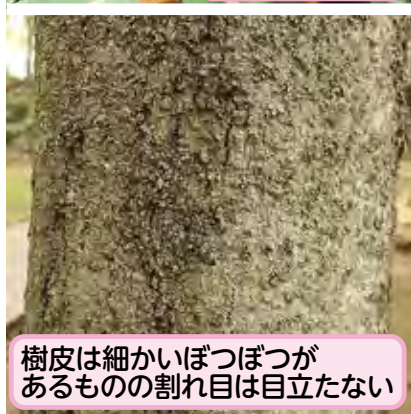


ちゅうとう
柱頭は3つに分かれる

雌花の穂は上向きにつく



帽子を横から見るとしま模様



樹皮は細かいぼつぼつがあるものの割れ目は目立たない

ヒユ科 アカザ属

シロザ (白ざ)

Chenopodium album L.

自生環境

畑地、荒地 など

原産地

日本在来

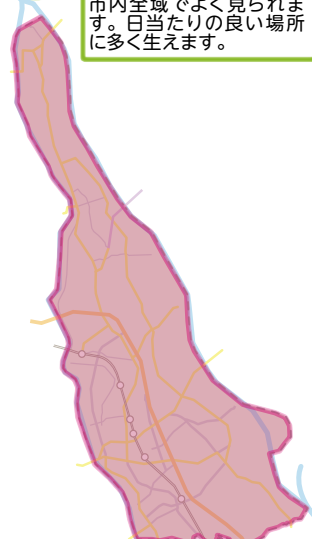
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。日当たりの良い場所に多く生えます。



赤、白、桃色…

シロザの名前にある「白」は、若い葉が白い粉を吹いて、茎の先が白っぽく見えることから来ています。この色違いで、若い葉の粉の色が赤紫色のものをアカザ、桃色のものをノアカザと言います。この3つのうち、市内で最も数が多いのはシロザで、ノアカザもそこそこの頻度で見かけます。しかし、アカザはかなりまれで、見つけたらあたりを引いた気持ちになるほどです。

特徴

- ☆ 日当たりの良い場所によく見られる1年草で、かなり古い時代に、ユーラシア大陸から渡来したと考えられています。通常は冬に枯れますが、市街地では越冬することもあります。
- ☆ 若い葉は白い粉を吹くため、茎の先が白っぽく見えます。茎は成長とともにたくさん枝を出し、夏から秋にかけて、多数の花を咲かせます。寒さに当たると真っ赤に紅葉します。
- ☆ 茎がとても頑丈なため、栄養たっぷりの場所で大きく育てると、杖を作ることができます。また、新芽は山菜として食べられます。ただ、大量に食べ続けると、体質によってはじんましんのような皮膚症状が出ることもあります。



花の大きさは
直径1.5mmほど



果実は五角形で
中のタネは1個

寒さに
当たると
真っ赤に
色づく



新芽は白っぽい

新芽は赤っぽい

変種

アカザ

クスノキ科 シロダモ属

シロダモ (白だも)

Neolitsea sericea (Blume) Koidz.

自生環境

山林、林縁、神社 など

原産地

日本在来

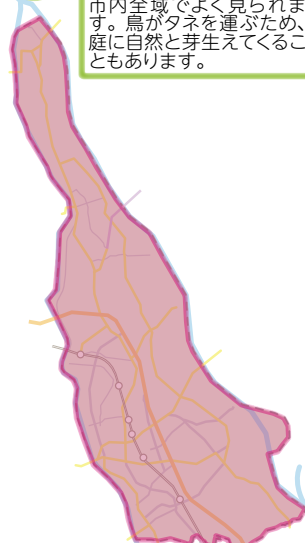
生育を脅かす要因

〔今のところ特になし〕

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域の樹木として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。鳥がタネを運ぶため、庭に自然と芽生えてくることもあります。



特徴

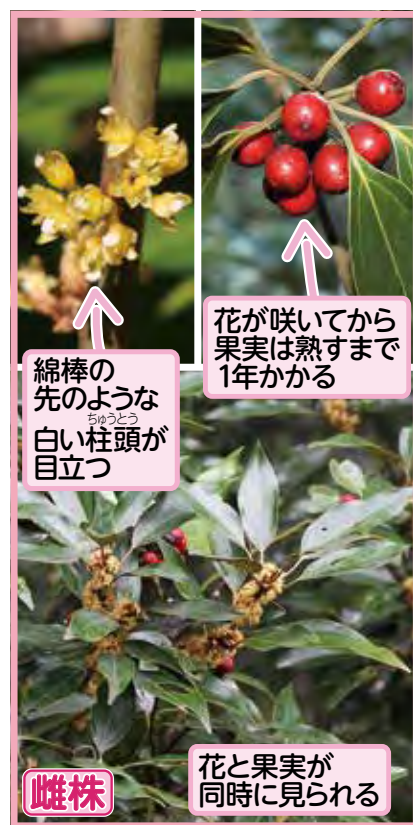
☆ シロダモは常緑広葉樹と呼ばれる、1年中青々とした葉を茂らせ、幅の広い葉をつけるタイプの樹種です。これは温暖な気候に適応したタイプですが、その中でシロダモは比較的寒さに強いほうで、東北南部にまで自然の分布があります。

☆ 常緑ですが、春になるといっせいに芽吹いて、若葉が展開します。若葉は薄茶色のやわらかい毛にびっしりと覆われており、肌触りはふわふわです。葉が成熟すると、表面の毛はなくなります。裏面は、ロウのようなものに覆われて白っぽい色をしています。

☆ 雌雄別株で、雄株・雌株ともに 10 ~ 11 月にくすんだ黄色い花を多数咲かせます。雌株はその後には果実ができますが、成熟するまでに約1年かかります。そのため、赤く熟した果実と花が同時に見られます。

葉のブツブツの正体は？

植物の体内に産卵する昆虫の多くは、植物組織を独特な形に変形させた「虫こぶ」をつくりまします。シロダモの葉にできるブツブツも、シロダモタマバエという小さなハエがつくった虫こぶです。虫こぶは、幼虫を外敵から守る強力なシェルターですが、残念ながらシロダモタマバエコマユバチという寄生蜂には無効のようで、高確率で寄生されてしまっています。



マメ科 シャジクソウ属

シロツメクサ (白詰草)

Trifolium repens L.

自生環境

道ばた、公園、造成地 など

原産地

ヨーロッパ

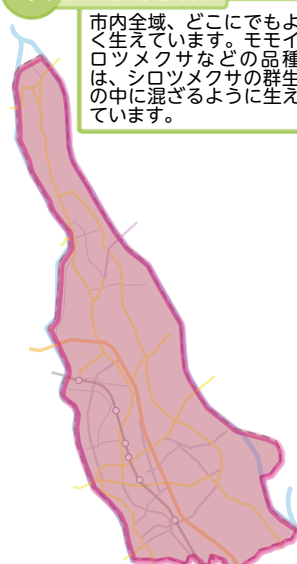
予想される被害



地面を覆うように広がっていくため、同じような環境に生える、他の小型植物の生育を妨げてしまう可能性があります。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく生えています。モモイロツメクサなどの品種は、シロツメクサの群生の中に混ざるように生えています。



特徴

- ☆ 日当たりが良く、背の高い草が少ないような場所によく生えています。英語名のクローバー（厳密にはホワイトクローバー）の名前でもよく知られています。3枚1組の小葉と、丸く集まった白い花の穂を次々と出しながら、地面をはうように伸びていきます。
- ☆ 牧草や景観作物、蜜源植物としても利用されます。牧草用に改良された大型品種のラジノクローバー（オオシロツメクサ）は、葉が子どもの手のひらくらい大きくなります。
- ☆ 花は白色が基本ですが、桃色の花を咲かせる品種のモモイロツメクサがあり、市内にも比較的多く自生しています。また、葉の色が黒っぽいクロバツメクサや、4つ葉のできやすい株が園芸用に栽培されています。

4つ葉のクローバー

シロツメクサの葉は、小葉が3枚1組となつてつくのが基本形ですが、ときに「4つ葉のクローバー」と呼ばれる4枚1組の葉が混じることもあります。また、5つ葉、6つ葉、7つ葉…と、より多くの枚数の葉が見つかることもあります。踏みつけなどの外的要因のほか、多数枚の葉ができやすい遺伝子を持っているなどの理由が考えられます。



タデ科 ギシギシ属

スイバ (酸い葉)

Rumex acetosa L.

自生環境

野原、土手 など

原産地

日本在来

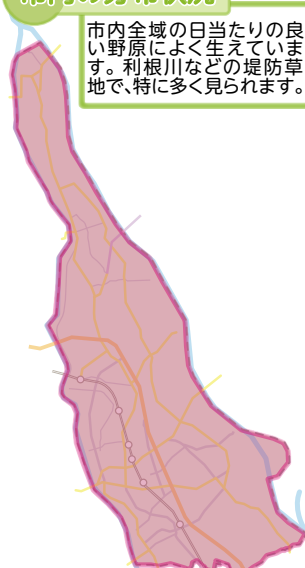
生育を脅かす要因

〔今のところ特になし〕

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域の日常当たりの良い野原によく生えています。利根川などの堤防草地で、特に多く見られます。



特徴

☆ 日常当たりの良い草地環境を好み、市内では堤防斜面に特に多く見ることができます。雌雄別株の多年草です。

☆ 葉の根元は矢じり形になっています。色は緑色ですが、寒さなどの影響で赤みがかった色になることもしばしばです。葉にはシュウ酸が含まれ、かじると酸っぱい味がします。ベニシジミというチョウの食草になっているため、スイバの多い場所ではたくさんのベニシジミを見ることができます。

☆ 春に茎を伸ばし、花の穂をつけます。花期の茎の高さは1m近くに達することもあります。雌株の花穂は、やがて果実の穂に変化します。果実は熟すと赤みを帯びて一層目立つようになります。

海外では野菜

スイバの葉はかじるとさわやかな酸味があり、日本でも山菜として摘んで利用することがあります。ヨーロッパでは、「ガーデン・ソレル」や「オゼイユ」などと呼ばれ、ハーブや野菜として広く栽培されています。サラダやソース、肉・魚料理などに利用できますが、ホウレンソウと同様にシュウ酸を含むため、下ごしらえが必要です。また、一度に大量に食べないようにしてください。

雄株



がくは
6枚

雌株



雌しべは
赤色で
ポンポン
のようにつく



雌株は
ぎっしりと
果実がつく

3枚のがくが
大きくなり
タネを包む

スギナ (杉菜)

Equisetum arvense L.

自生環境

土手、畑地、あぜ など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域の野草として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

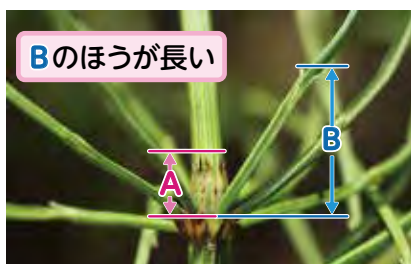
スギナ自体はどこにでもよく生えていますが、つくしは必ず出るとは限りません。つくしは、日当たりの良い野原やあぜなどに出やすい傾向があります。

特徴

- ☆ 日当たりの良い場所で見られる多年草です。地上部は高さ 30cm 前後ですが、土の中では地下茎や根を深く長く張り巡らせます。一見たくさんの株があるようでも、実は地中で全部つながっていることも多く、どこまでが 1 株なのかを調べるのは容易ではありません。
- ☆ シダ植物なので胞子で繁殖します。春先に出てくる「つくし」は、スギナの胞子を出すための茎（胞子茎）で、頭の部分（胞子嚢穂）から青緑色の粉のような胞子が大量に放出されます。
- ☆ 「つくし」の後に出てくる緑色の部分が、一般に「すぎな」と呼ばれています。これはスギナの栄養茎です。「つくし」は胞子を放出するとすぐに枯れますが、「すぎな」は霜が降りるまで出続けます。

ミモチスギナ

スギナは、胞子をつくる茎（胞子茎、つくし）と、養分をつくる茎（栄養茎、すぎな）を別々に出します。そのため、普通は栄養茎の先に胞子嚢穂をつけることはありません。ただ、ミモチスギナと言って、まれに栄養茎の先に胞子嚢穂がつくことがあります。ミモチスギナは秋～初冬に出やすく、「つくし」と「すぎな」どっちを出そうか迷った結果、中途半端になったのではないかと考えられます。



イネ科 ススキ属

ススキ(薄)

Miscanthus sinensis Andersson

自生環境

野原、林縁、道ばた など

原産地

日本在来

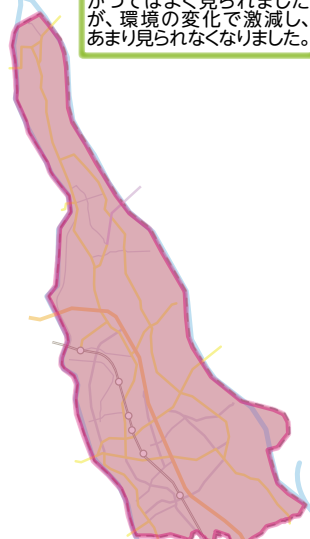
生育を脅かす要因



乾燥した草原の代表種ですが、市内では激減しました。その原因として、セイバンモロコシなど外来種の繁茂、そして人間活動に伴う草原環境の消失などが考えられます。

市内の分布状況

かつてはよく見られましたが、環境の変化で激減し、あまり見られなくなりました。



特徴

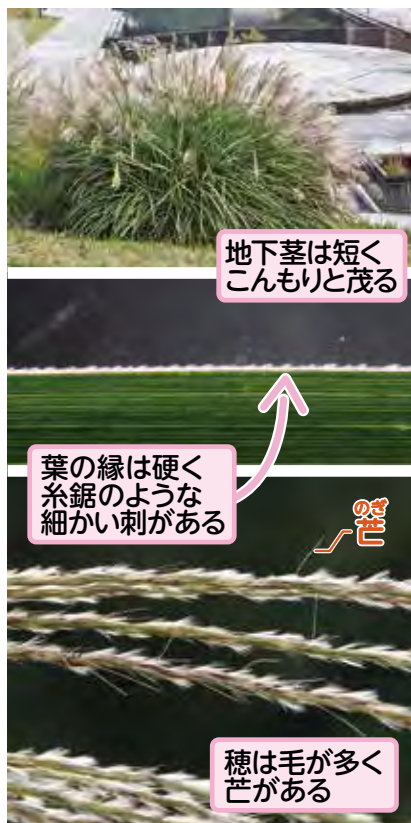
- ☆ 日当たりの良い乾いた草原を代表する大型の多年草で、しばしば群生して「ススキ草原」という環境を形づくりします。オギのように長い地下茎を出さないため、1か所でこんもりと茂るような姿となります。ナンバンギセル（ハマウツボ科）はススキの根に寄生しますが、すっかり少なくなっていました。
- ☆ 秋になると、ずっと立ち上がった茎の先に薄い茶色の穂をつけます。茎の上部にはほとんど葉はつきません。穂は毛が多く、その中に硬い芒が混じります（オギには芒はありません）。タネが成熟すると穂の毛は白くふわふわになり、風に乗って遠くに運ばれていきます。
- ☆ 斑入りの葉をつける園芸品種がいくつかあり、栽培されています。代表的なのは、鷹の羽根を連想させる模様が入るタカノハススキと、しま模様になるシマススキです。

秋の七草の尾花

万葉の時代、山上憶良は「萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝顔の花」として秋の七草を詠みました。これを現行和名にすると、ヤマハギ、ススキ、クズ、カワラナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウで、ススキ群落の植物が勢ぞろいします。「尾花」がススキのことで、近年はススキ草原の減少とともに、七草の一部は絶滅危惧種になるまで追い詰められているものもあります。



茎の上部に葉はあまりつかない



地下茎は短くこんもりと茂る

葉の縁は硬く糸鋸のような細かい刺がある

穂は毛が多く芒がある



葉に鷹の羽根のような模様がある

園芸品種

タカノハススキ

の穂 芒 … イネ科の花の穎（花を包み保護するもの）の先にある、針のような部分のこと。

マメ科 ソラマメ属

スズメノエンドウ (雀野豌豆)

Vicia hirsuta (L.) Gray

自生環境

土手、野原、道ばた など

原産地

日本在来

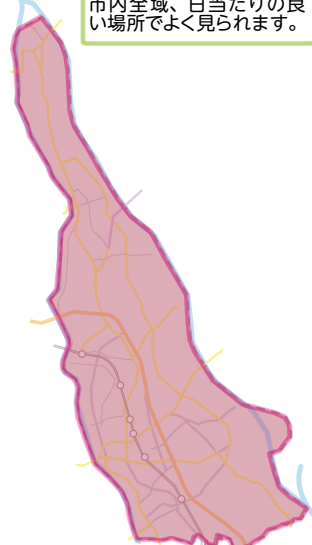
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、日当たりの良い場所でよく見られます。



特徴

☆ 日当たりの良い乾燥した場所によく生える1～越年草です。カラスノエンドウ (p53) と同じ仲間ですが、それに比べると葉や花、果実が小さくて、全体的に繊細な感じであるため、カラスに対してスズメを当てたのが名前の由来です。

☆ 春に葉のわきから長い柄を伸ばし、その先に数個の小さな花を咲かせます。花の大きさは 3mm 程度、白っぽい色をしていますが、よく見るとわずかに紫がかったいます。

☆ 果実は、いわゆる豆の形をしています。さやは長さ1cmほどで、表面には細かい毛がたくさん生えています。中には2個の豆(タネ)が入っています。さやは成熟すると黒くなり、パチンと音を立てて弾けます。

巻きひげで支えあう

スズメノエンドウの葉は、12～14枚ほどの細長い「小葉(しょうよう)」が鳥の羽根のようについて、それで1枚の葉を形づくっています。先端は巻きひげになっていて、これでつかまりながら、自分の体を支えています。スズメノエンドウが何株も生えている場所では、お互いの巻きひげを絡ませて、支えあいながら茎を伸ばしていきます。この支えあいはカラスノエンドウにも見られます。



紫がかった
小さな白い
花が3～5個
ずつ咲く



果実は毛深く
熟すと黒くなる

タネは中に
2個ずつ入る



12～14枚もの
細長い小葉が
羽根のようにつく

先端は
巻きひげになる



全体的に細くて
やさしい感じの草



お互いに巻きひげで
支えあいながら立ち上がっていく

イネ科 イチゴツナギ属

スズメノカタビラ (雀の帷子)

Poa annua L.

自生環境

水田、湿地 など

原産地

日本在来

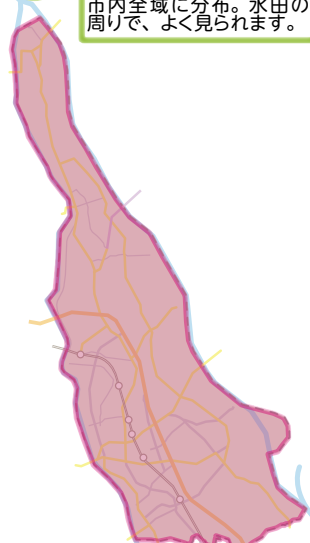
生育を脅かす要因



水田周辺でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。ただ、外来種のアオスズメノカタビラに押され気味で、今後の動向が少し気になります。

市内の分布状況

市内全域に分布。水田の周りで、よく見られます。



特徴

- ☆ 一般にスズメノカタビラと呼ばれているものには、2つの系統があります。本来のスズメノカタビラは水田に生える本種のこと、道ばたでよく見かけるものはアオスズメノカタビラと言うヨーロッパ原産の別の系統です。
- ☆ 米作りの暦に適應した生活サイクルを送っています。つまり、稲刈り後に発芽して越冬、早春に開花・結実をして、水田の作業が始まる前にはタネを残して枯れていきます。積雪の少ない地域では、冬の間に花の穂を出します。
- ☆ 草丈は5～15cm ほどで、茎は株元でひょろひょろせず、がっしりとしています。葉は黄緑色で、寒さに当たるとやや紫がかります。穂は紫がかった色です。小穂（しょうすい）をつなぐ軸の部分には小さな刺はなく、護穎に毛がある点もアオスズメノカタビラとは異なります。

どの部分が帷子なの？

名前にある帷子（かたびら）は、麻や絹でつくった裏地のない着物のことを言います。いわば「昔の肌着」です。では、スズメノカタビラのどの部分がそれを連想させるのでしょうか。答えは穂です。穂をルーペで見ると、護穎の重なり具合が、着物のあわせの部分の連想させるのです。しかし、これを見て帷子を思い浮かべるなんて、昔の人の想像力は脱帽ものですね。



穂の色は紫がかる

株元はがっしりしている



葉は黄緑色で寒さに当たるとちよっぴり紫がかる



こゑい護穎

護穎に毛がある

護穎の重なりが着物のあわせを連想させる



穂の軸に小さな刺はない



霜をまといつつ穂を出す真冬のスズメノカタビラ



早春の水田を埋めつくす黄緑色のスズメノカタビラ

しょうすい 小穂... イネ科の花のあつまりの単位のこと。花の数はさまざま。
こゑい 護穎... イネ科の花を包み保護する穎の一種。

イネ科 スズメノテッポウ 属

スズメノテッポウ (雀の鉄砲)

Alopecurus aequalis Sobol. var. *amurensis* (Kom.) Ohwi

自生環境

水田、畑地、野原 など

原産地

日本在来

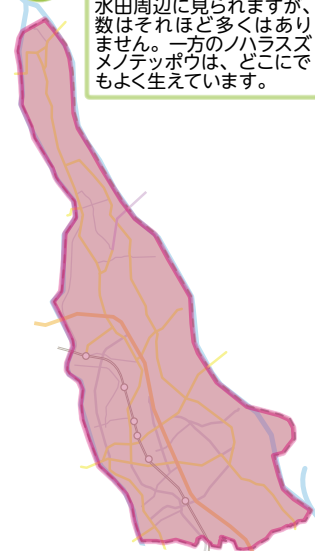
生育を脅かす要因



水田型(狭義のスズメノテッポウ)は、安定した水田環境に見られますが、市内では少数派です。一方の畑地型(ノハラスズメノテッポウ)は数も多く、絶滅の心配はありません。

市内の分布状況

水田周辺に見られますが、数はそれほど多くはありません。一方のノハラスズメノテッポウは、どこにでもよく生えています。



特徴

- ☆ 従来スズメノテッポウと呼ばれていた草は、水田環境に適応した狭義のスズメノテッポウと、畑地環境に適応したノハラスズメノテッポウの2つの変種に分けられました。
- ☆ 狭義のスズメノテッポウは、水田などの湿った場所に多く、米作りの作業暦に合わせた生活を送っています。つまり、稲刈り後に発芽してそのまま越冬し、田起こし前の早春に開花・結実して、作業が始まる前にはタネを残して枯れてしまうという流れです。
- ☆ 水田の場合、毎年耕す時期が決まっているため、それに合わせて時間をかけてじっくりと充実した強いタネを残すことができます。そのため、狭義のスズメノテッポウのタネは大きく、穂もずんぐりとした姿をしています。

ノハラスズメノテッポウ

一方で、畑のように乾燥していて、いつ耕されるか分からないような環境に適応したものがノハラスズメノテッポウです。ノハラスズメノテッポウは、充実したタネをつくるよりも、いかに短時間でたくさんタネを残すことができるのかに重点を置いています。そのため、スズメノテッポウに比べるとタネは小さく、穂も細くなる傾向があります。ときに、10cm未満の草丈で穂を出すこともあります。



茎の先に
少しずんぐりとした
棒のような穂がつく



穂には
短い
のき
芒がある



雄しべは
時間とともに
だいたい色に
なる



スズメノテッポウ
よりも穂が細い

母種

ノハラ

スズメノテッポウ

スミレ科 スミレ属

スミレ(堇)

Viola mandshurica W.Becker

自生環境

道ばた、野原、土手 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



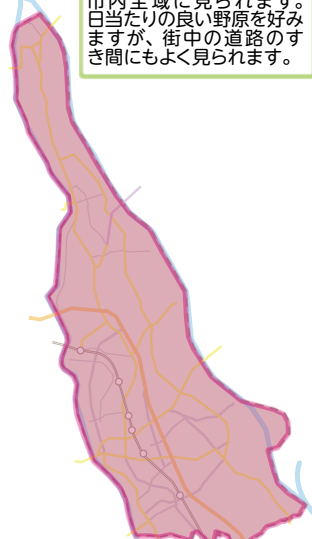
比較的数字は多く、花もきれいなため人々に愛されています。ただ、人の生活圏内に生えるため、除草剤散布などのちょっとした出来事による影響を受けやすい傾向があります。

特徴

- ☆ 日当たりの良い草地に多く生える多年草ですが、1株の寿命は数年程度と比較的短命です。アリがタネを運ぶためか、道ばたのアスファルトのすき間などにもよく出現します。
- ☆ 春に直径2cmほどの花を次々と咲かせます。色は「堇(すみれ)色」とも称されるあでやかな紫色で、花の中心付近は色が薄くなっています。側弁には通常毛が生えています。大型連休を過ぎる頃には紫色の花は咲かなくなりますが、秋にかけて閉鎖花を次々と出しタネをつくり続けます。
- ☆ スミレにはさまざまな品種や変種が知られており、一部は栽培されています。代表的なものに、長野県小諸市で見つかった八重咲き品種のコモロスミレ、箱根の明神ヶ岳で見つかった花の中心付近が濃紫色のミョウジンスミレなどがあります。

市内の分布状況

市内全域に見られます。日当たりの良い野原を好みますが、街中の道路のすき間にもよく見られます。



実は秋まで花が咲く

春に可憐な花を咲かせて人気者のスミレですが、花が終わると誰一人と見向きもしなくなります。しかし、実はスミレは霜が降りる頃まで、目立たないながらも、ずっと花を咲かせ続けているのです。この花は、春の花とは違い、つぼみのような状態のまま中で自家受粉で完結して結実するもので、閉鎖花と呼ばれています。ぜひ、春以外のスミレにも注目して閉鎖花を探してみてくださいね。



春に紫色の花を咲かせる



通常側弁に毛がある

唇弁

距は紫色



へいさか 閉鎖花

春以外の季節は開かない花がつく

果実は熟すと3つに割れてタネが顔を出す



園芸品種

ミョウジンスミレ

花の中心が濃い紫色



花は八重咲き

品種

コモロスミレ

距 … 花の後ろ側にあり、細長く突き出した部分のこと。

キク科 アキノキリンソウ属

総合対策
(重点)

セイタカアワダチソウ (背高泡立草)

Solidago altissima L.

自生環境

河川敷、荒地地 など

原産地

北アメリカ

予想される被害

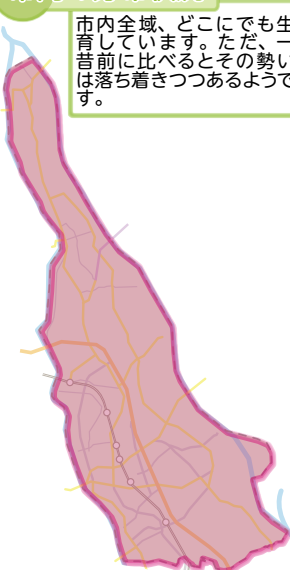
駆逐



一面を覆いつくすような猛烈な繁殖力を持ち、どんな環境でも生育できる適応力があります。そのため、豊かな自然が残された場所に侵入して、希少種の生育を妨げます。

市内の分布状況

市内全域、どこにでも生育しています。ただ、昔前に比べるとその勢いは落ち着きつつあるようです。



特徴

☆ かつては園芸植物として栽培されたり、花の少ない時期の蜜源植物として養蜂業者が広めようとしたりと、どちらかと言えば役に立つ植物としての位置づけでした。しかし、第二次世界大戦後、一気に雑草化し日本全国に広がり、今では荒地地を覆いつくす勢いで繁茂しています。

☆ 地下茎を張り巡らしながら広がっていく上に、大量の綿毛つきのタネをまき散らし、しかも多年草で株の寿命が長いため、目を見張るような勢いで繁殖していきます。根からは他の植物の生育を抑制する成分を出しますが、自分で出した成分にやられて、勢いは次第に衰えつつあります。

濡れ衣を着せられた草

セイタカアワダチソウは、秋にいっせいに開花し、ピーク時には一面が真っ黄色になります。これが花粉を連想させるからでしょうか、かつては花粉症の原因として嫌われていました。ところが、セイタカアワダチソウは虫媒花。その花粉はチョウやハチなどの昆虫に託し、空中にまき散らすことはありません。普通に生活している限り、花粉症の原因にはならず、とんだ濡れ衣を着せられた草と言えます。

黄色い菊のような
小さな花がびっしり
集まっている

1本の茎にびっしりと
綿毛つきのタネができる

茎や葉は
ざらざらしている

冬の間も
株元に葉が
出ることが多い

イネ科 モロコシ属

総合対策
(その他)

セイバンモロコシ (西蛮蜀黍)

Sorghum propinquum (Kunth) Hitchc.

自生環境

道ばた、土手、荒地地 など

原産地

アフリカ

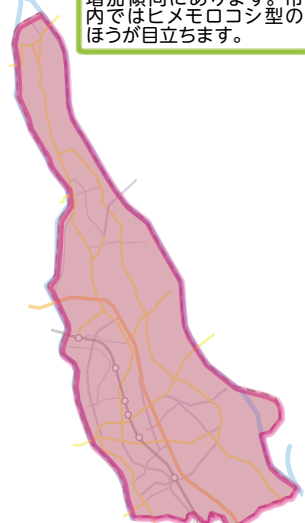
予想される被害



風媒花なので、花粉を空中にまき散らして、イネ科花粉症の原因になります。また、繁殖力が非常に強く、多年草であるため、一度入り込むと地域の生態系に大きな打撃を与えます。

市内の分布状況

どこにでも見られ、年々増加傾向にあります。市内ではヒメモロコシ型のほうが目立ちます。



特徴

- ★ 世界中で手に負えない勢いで増えている「悪名高き草」です。国内では 1945 年頃に関東地方で発見され、以降急増しました。市内でもいたるところに生え、もともとあったススキなどの在来種の生育場所を奪ってしまっています。
- ★ 地下茎をどんどん伸ばし、わずかにちぎれた地下茎の断片からも新しい株として育ちます。また、1つの株の寿命が長く、一度生えたと簡単には抜けないくらい深く根を張ります。さらに、周りの植物の生育を抑える成分を出し、広範囲にわたってセイバンモロコシだけが占領する状態になってしまいます。
- ★ 初夏から秋にかけて、茎の先に赤茶色の大きな穂をつけます。小穂の先には長い芒がありますが、芒のないヒメモロコシと言う品種もあります。市内にはヒメモロコシが多く、芒の出かたが中途半端でどちらともつかないものもしばしば見受けられます。

牧草には向かない

セイバンモロコシは英語でジョンソングラスと呼ばれます。これは、かつてジョンソンさんが牧草の候補に選んだことにちなみます。ところが、葉に含まれる青酸配糖体は、分解すると強い毒を持つ青酸(シアン化水素)になるため、家畜には有毒です。よく乾燥させた「乾草」なら問題ないようですが、生乾きだと家畜が命を落とすこともあります。そのため、牧草としてはほとんど使われないようです。



しょうすい
小穂の
先に
のぎ
芒がある

穂は
円錐形で
赤みが
かっている



葉の感じは
トウモロコシに
よく似ている



タネは黒っぽくて
強い光沢がある



小穂に芒はない

品種

ヒメモロコシ

しょうすい
小穂... イネ科の花のあつまりの単位のこと。花の数はさまざま。

芒... イネ科の花の穎(花を包み保護するもの)の先にある、針のような部分のこと。

セリ科 セリ属

セリ (芹)

Oenanthe javanica (Blume) DC.

自生環境

湿地、水辺 など

原産地

日本在来

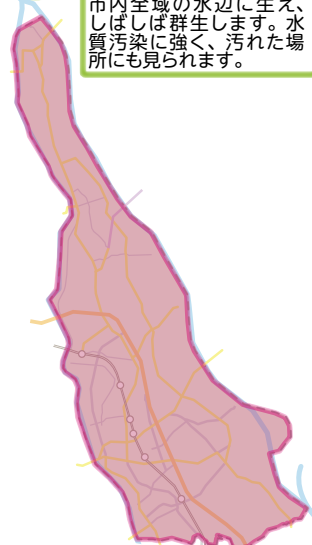
生育を脅かす要因



水辺によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域の水辺に生え、しばしば群生します。水質汚染に強く、汚れた場所にも見られます。



特徴

- ☆ 水辺によく生える多年草です。ときに、野原や林縁など、土がそれほど湿っていないような場所にも見られます。
- ☆ 地下茎と、地表をはう茎を横に長く伸ばして、節々から根と葉を次々と出しながら旺盛に広がっていきます。名前のセリは、まるで競り（せり）あうかのように葉を出しているように見えることから来ていると言われています。
- ☆ 初夏になると茎が立ち上がり始め、草丈は 30 ～ 50cm ほどにまで伸びます。7～8月頃、茎の先に小さな白い花を傘状につけます。花びらは、中心から山折りにしたように折りたたまっており、先端は軽く切れ込みます。

日本原産の健康野菜

セリは、さわやかな香りとしゃきっとした食感が魅力の緑黄色野菜で、スーパーの店頭にも普通に並んでいます。また、冬の間も青々とした葉を出していて、風邪予防や胃の疲れを取る効果があるとされ、春の七草のひとつとして七草がゆにも入れられてきました。ただ、水辺には、タガラシなどの有毒植物も生えているため、セリ摘みの際は混入しないように気をつけましょう。

夏に茎を伸ばし
白い花を咲かせる

花は白色で
花びらは5枚

葉は
やわらかく
香りが良い

花の頃の
茎や葉は硬くて
あまり美味しくない

果実は楕円形で
熟すと2個に分かれる

地下茎だけではなく
地上でも地面を
はうような茎を伸ばす

タコノアシ科 タコノアシ属

タコノアシ(蛸の足)

Penthorum chinense Pursh

レッドリスト
の位置

環境省



自生環境

河川敷、湿地、水辺 など

原産地

日本在来

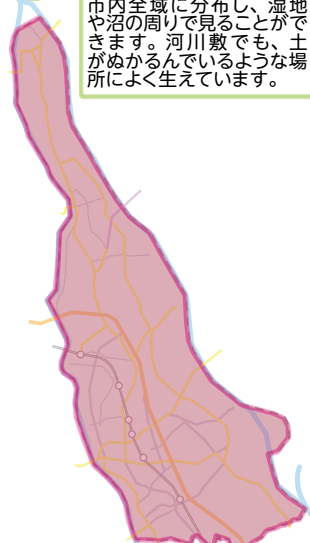
生育を脅かす要因



環境省レッドリストでは準絶滅危惧ですが、野田市では比較的良好に見られます。それでも外来種との競争、湿地の埋め立てや乾燥化などの影響を受けやすいため、油断は禁物です。

市内の分布状況

市内全域に分布し、湿地や沼の周りで見ることができます。河川敷でも、土がぬかるんでいるような場所によく生えています。



特徴

- ☆ 多年草ではありますが、生き続けるためには定期的なかく乱(洪水や天地返しで表土がかき混ぜられること)が必要です。そのため、突然大量発生したかと思いきや、パタッと消滅してしまうという感じで、同じ場所で毎年必ず見られるとは限りません。
- ☆ 花のない時期はヤナギの若木に雰囲気似ています。花の穂が出るのは8~9月頃。その形はまるでタコのあしを逆さまにしたような姿で、これが名前の由来になっています。花に花びらはありませんが、ときに花びらの痕跡のようなものが1~2枚つくこともあります。
- ☆ 秋、気温が下がってくると次第に紅葉し、穂もタコのあしの形のまま真っ赤になります。その姿は「ゆでだこ」と呼ばれ、親しまれています。

タコノアシは何科の植物？

植物図鑑に書かれている「○○科」は、分類上、その植物が所属するグループ名のようなもの。その分けかた(分類体系)には、いくつかの方法があります。中にはどれを採用するかで、所属が変わる植物もあり、タコノアシもそのひとつです。タコノアシの科名はベンケイソウ科、ユキノシタ科、タコノアシ科と本によって違いますが、これはその本がどの分類体系を採用しているかの違いです。



アブラナ科 タネツケバナ属

タネツケバナ (種漬花)

Cardamine occulta Hornem.

自生環境

湿地、水田、河川敷 など

原産地

日本在来

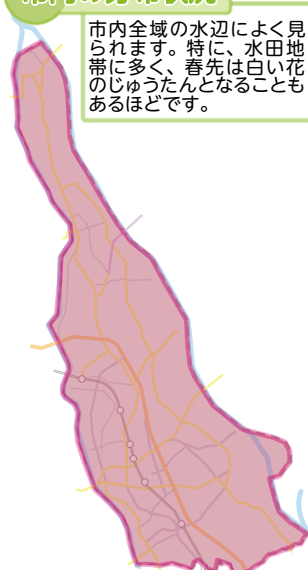
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域の水辺によく見られます。特に、水田地帯に多く、春先は白い花のじゅうたんとなることもあるほどです。



特徴

- ☆ 湿った場所によく生え、水辺ではしばしば群生します。株ごとに個性が出やすく、葉の色や形、茎の色、草丈、全体の草姿、毛の様子などをていねいに観察すると、その形態のバリエーションの豊富さに驚かされます。
- ☆ 主な花期は春ですが、気候のよく似た秋から初冬にかけても花が見られます。花が咲き進むとともに茎が伸び、果実の穂になります。果実は棒状で、熟すと皮が2つにくるんとまくれるようにして弾け、中のタネを勢いよくまき散らします。タネは水にも浮かび、流れに乗ってさらにあちこちへと拡散していきます。
- ☆ タネツケバナの葉にはほんのりカラシナのような風味があり、食用になります。ただ、水辺の野草には寄生虫がついていることがあるので、食べる場合はよく水で洗うことをオススメします。

タネツケバナと水田

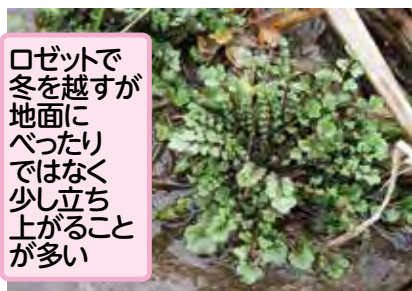
タネツケバナを漢字で書くと種漬花。これは、苗代をつくるために種もみを水に漬ける頃に花が咲くという意味です。タネツケバナは水辺を好み、水田内にもよく生えます。米作りの暦にもうまく適応しており、稲刈り後に芽を出し始め、ロゼットの状態で越冬、そして田起こし前にいっせいに開花・結実して、タネを残します。早春の水田で咲き乱れるタネツケバナは、なかなか美しいものです。



花びらは
白色で4枚
雄しべは6本



茎や葉にはっきりと
毛が生えることが多い



ロゼットで
冬を越すが
地面に
べったり
ではなく
少し立ち
上がるこ
とが多い



果実は棒のような形で
斜め上に向かってつく



田起こし前の水田を
真っ白に染める
タネツケバナの群生

イネ科 チカラシバ属

チカラシバ (力芝)

Pennisetum alopecuroides Spreng.

自生環境

道ばた、野原 など

原産地

日本在来

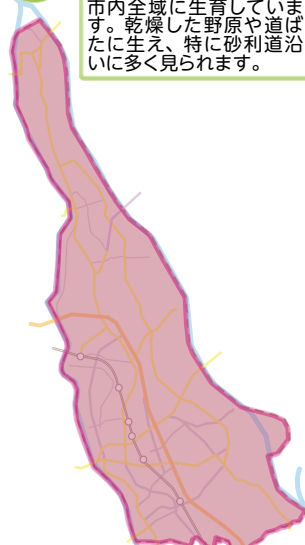
生育を脅かす要因



道ばたを好むため、除草剤散布や舗装など人間活動の影響を受けやすい傾向があります。ありふれた草ですが目の敵にはせず、地域の野の花としてやさしく見守りたいところです。

市内の分布状況

市内全域に生育しています。乾燥した野原や道ばたに生え、特に砂利道沿いに多く見られます。



特徴

- ☆ 乾燥した野原や道ばたなどに生え、しばしば群生します。特に、砂利道に沿って多く見られる傾向があります。多年草で、何年もかけて根をがっしりと張っていきます。
- ☆ 夏の終わりから秋にかけて、エノコログサを大きくしたようなブラシ状の穂を次から次へと出します。穂の剛毛は紫がかった色をしているのが普通ですが、ごくまれに緑色のもの(アオチカラシバと言う)も見られます。
- ☆ タネが熟すと、小穂(しょうすい・穂を構成するツブツブの部分)がそっくりそのまま軸から外れるように脱落していきます。そのため、冬場は軸だけが残ってツンツンとした姿になります。タネは服や動物の体に刺さるようにくっつき、遠くまで運ばれていきます。

とても力強い草

チカラシバを漢字で書くと力芝。多年草で何年もかけて大株に育ち、がっしりと力強く根を張ることが名前の由来となっています。童話『大きなカブ』のように、大人が思いっきり引っ張っても抜けません。茎や葉も強く、引っ張っても簡単にはちぎれません。穂を摘むときは、勢いよく引っ張ると手を切ってしまうので、ハサミを使うか、爪を使ってねじ切るようにします。

毛は紫がかった色



冬になると穂の軸だけが残ってツンツンして見える



毛は緑色



大きなブラシのような穂がたくさんつく

品種

アオチカラシバ

ツユクサ科 ツユクサ属

ツユクサ (露草)

Commelina communis L.

自生環境

道ばた、野原 など

原産地

日本在来

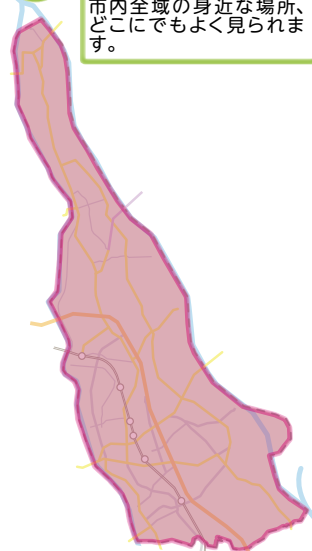
生育を脅かす要因

〔今のところ特になし〕

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域の身近な場所、どこにでもよく見られます。



特徴

☆ 身近な場所によく生える1年草です。茎はやわらかく、折れやすいのですが、節々から根を出す性質があります。環境適応力も強く、水に浸かったり、乾燥や直射日光にさらされたりしても動じないほどの強さを持っています。

☆ 花弁は3枚ですが、うち1枚は小さくて目立ちません。花弁の青色は、紙などにこすりつけると色がつくため、古くはツキクサと言い、それが転訛（てんか）してツユクサとなりました。この青い色素は、手描き友禅の下絵にも使われています。

☆ 夏から秋にかけて開花しますが、夏は朝のうちでしぼんでしまいます。秋になって気温が下がると、比較的遅い時間まで咲くようになります。

ツユクサは個性豊か

ツユクサは、花色や花弁の形などにいろいろな個性があり、さまざまな名前がつけられています。花色の個性として、白色花のシロバナツユクサ、薄い紫色のウスイロツユクサ、花弁が白く縁どられたようになるメガネツユクサがあります。また、花弁がウサギの耳のように細長いウサギツユクサ、葉に斑が入るギンシツユクサ、苞に毛が生えるケツユクサなどもあります。

虫をおびきよせるための飾り雄しべ花粉は出ない



タネはごつごつしている

果実は苞の中で育ち 熟すと苞の外に顔を出す



花は白い



品種

シロバナ
ツユクサ

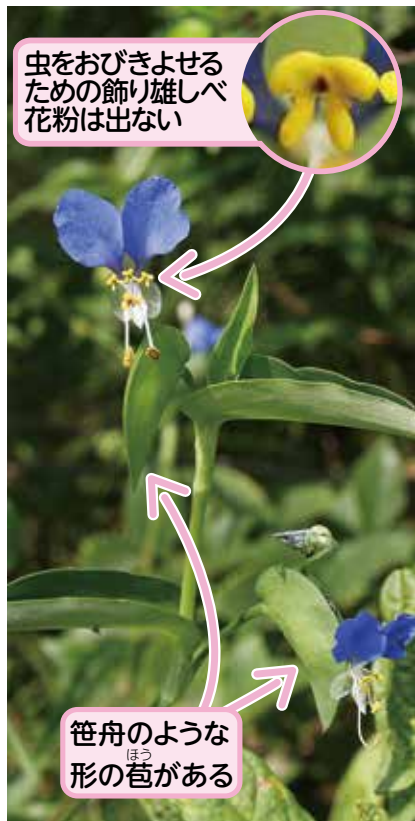
苞に
毛がある

品種

ケツユクサ



笹舟のような
形の苞がある



マメ科 ダイズ属

ツルマメ (蔓豆)

Glycine max (L.) Merr. subsp. *soja* (Siebold et Zucc.) H. Ohashi

自生環境

野原、道ばた、河川敷 など

原産地

日本在来

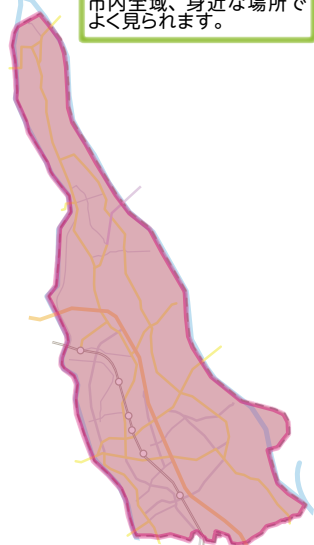
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に育つ野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、身近な場所で見られます。



特徴

- ☆ 身近な場所で見られる1年草です。茎は、つるになってあちこちに絡みついたり、覆いかぶさったりしながら旺盛に伸びていきます。葉はいわゆる3つ葉（小葉が3枚）です。花のない時期はヤブマメにも似ますが、小葉はそれに比べると細長い形をしています（ヤブマメの小葉はひし形に近い）。
- ☆ 夏～秋に、紫色の小さな花が葉のわきに咲きます。濃淡や色味の違いなど、株によって花色に多少の個性が見られます。
- ☆ 果実は、枝豆をミニチュアにしたような形です。中に豆（タネ）が3個ほど入っていますが、これは小さくて硬いため、食用には不向きです。果実は成熟するとパチンと音を立てて弾け、中の豆をまき散らします。晩秋の頃、晴れた日に野辺を歩くと、ツルマメのはぜる音がほうぼうから聞こえてきます。

ダイズの原種と言われる

野田市といえば、枝豆や大豆のイメージがありませんね。どちらもダイズという植物の果実（豆）で、未熟な状態で収穫したものを枝豆、完熟させたものを大豆として区別しています。栽培の歴史も古く、多種多様な栽培品種が知られています。ダイズは栽培種ですが、そのもとになった野生種（原種）が、このツルマメと言われています。言われてみれば、花や果実の雰囲気はよく似ていますね。

花の
大きさは
5～8mm
くらい



つるで
あちこちに
絡みつく



小葉は3枚

しょうよう
小葉

豆のさやは
茶色い毛が
びっしり生える



中の豆は
小さく硬い



晴れた日にパチンと
音を立てながらはぜる

白い花もある



茎はつるに
ならず
自力で立つ
ものが多い



豆は
ツルマメ
よりも
大きい

亜種
ダイズ

サギゴケ科 サギゴケ属

トキワハゼ (常磐爆ぜ)

Mazus pumilus (Burm.f.) Steenis

自生環境

庭の隅、畑地、あぜ など

原産地

日本在来

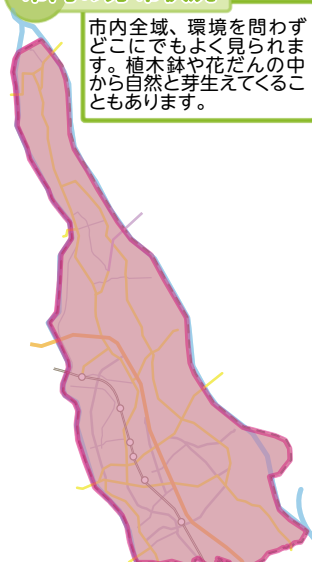
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

身近な場所で見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わずどこにでもよく見られます。植木鉢や花だんの中から自然と芽生えてくることもあります。



特徴

☆ 公園の隅や道ばた、畑地やあぜなど、いたるところに生えている小さな草です。日当たりの良い場所に限らず、建物や樹木の影などで薄暗くてゼニゴケに覆われていたり、土がむき出しになっているような場所でもよく見かけます。ただ、背の高い草が生い茂っているような環境には見られません。

☆ 花は薄い紫色で、黄色やだいたい色の斑紋があります。ごくまれに白い花を咲かせる株もあり、これをシロバナトキワハゼと言います。季節に関係なく、ほぼ周年開花します。

☆ ムラサキサギゴケに似ていますが、トキワハゼは1年草で、地をはうような長い茎が伸びることはありません。花はムラサキサギゴケよりも小型で色も淡めですが、両者とも個体差があるので、見分けポイントとしてはオススメできません。

花粉を飲み込む

トキワハゼやムラサキサギゴケの柱頭（雌しべの先端部分）はまるで蛇の頭のように2つに裂けていて、口を開けたような状態になっています。そこに昆虫がやってきて、柱頭に接触すると、その刺激で口を閉じます。しばらくするとまた口を開け、接触刺激があると口を閉じます。この動きを柱頭運動と言い、受粉を確実にするための仕掛けと考えられます。



だいたい色の模様がある



地面を長くはう「ほふく枝」は出さない



がくの中に丸みを帯びた果実ができる



熟すと割れて中から細かいタネがたくさんこぼれる



※観察用に花びらを取り除いてあります

ちゅうとう 柱頭は口を開けたヘビのような形



触るとパクッと閉じる

ドクダミ科 ドクダミ属

ドクダミ (葎草)

Houttuynia cordata Thunb.

自生環境

林内、公園の木陰 など

原産地

日本在来

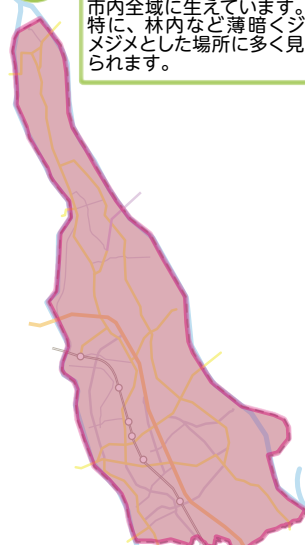
生育を脅かす要因

〔今のところ特になし〕

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域に生えています。特に、林内など薄暗くジメジメとした場所に多く見られます。



特徴

- ☆ 薄暗くてジメジメとした、やぶ蚊のいそうな場所によく生育しています。地下茎でどんどん増えていくため、一面のドクダミの群生となることもあります。
- ☆ 茎や葉には独特の悪臭があり、その臭いでドクダミの存在に気づくほどです。しかし、古くから何にでも効く薬草として重宝され、現代でも健康茶の材料として根強い人気があります。また、加熱すると臭いは消え、山菜として食べることもできます。
- ☆ 梅雨の頃にいっせいに花を咲かせます。白い花びらのようなものは花びらではなく、葉が変化してできたものです。本当の花は中心に立つ黄色い棒状の部分で、ここに雄しべと雌しべだけのシンプルな構造の小さな花がぎっしりとつきます。

ドクダミを栽培？

ドクダミは健康茶の原料となるため、有用植物として栽培されています。また、白い花びらのようなものが多数ついて豪華なヤエドクダミや、カラフルな葉をつけるゴシキドクダミなどの園芸品種があり、観賞用にも栽培されています。しぶとくて臭い、嫌われ者のイメージが強いドクダミですが、実は無限大の魅力を秘めた、「日本原産のハーブ」なのです。



ケシ科 ケシ属

ナガミヒナゲシ (長実雛罌粟)

Papaver dubium L.

自生環境

道ばた、畑地、荒地 など

原産地

地中海沿岸

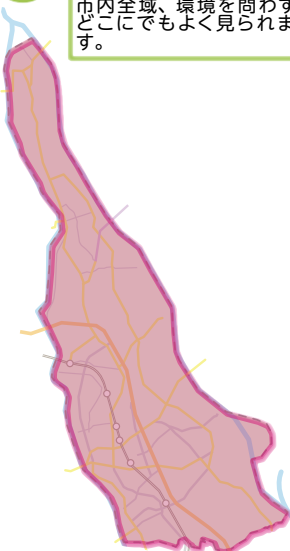
予想される被害



1つの花から膨大な数のタネができ、すさまじい繁殖力を見せています。他の植物の生育場所を奪う上に、農地にどんどん侵入して「畑の強害雑草」にもなっています。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わずどこにでもよく見られます。



特徴

☆ 国内では、1961年に東京で発見された後、しばらくは比較的珍しいものでしたが、2000年代に入ってから爆発的な勢いで広がり、今ではすっかり初夏の景色の1つとして定着しています。日本では特に区別はされていませんが、原産地では花の形などからいくつかの亜種に分けられています。

☆ 4～5月頃にいっせいに開花します。花はだいたい色で、黒い斑紋が入ることもあります。花びらは通常4枚ですが、枚数はしばしば変動します。また、花の大きさは環境によって大きく変動し、同じ種類とは思えないほど小さな花をつけることもあります。

☆ 果実は円柱形で上向きにつきます。この中には砂粒のように細かいタネがぎっしりと詰まっています。種子生産力がとても強く、1株で15万粒ものタネがつくられるとも言われています。

都市化が繁殖を手助けか

ナガミヒナゲシは、21世紀に入ってから爆発的な勢いで広がりました。この急拡大にはさまざまな理由が複雑に絡み合っています。その最大の理由は、タネが砂粒のように細かく、雨の日にタイヤにつくなどして車が広げたというものです。また、都市化で冬の気温が高くなり株がよく育って種子生産力が高められていること、花がきれいで刈られずに残されていることなどの理由も挙げられています。

ときに
黒い斑紋が
入ることも

花びらは
通常4枚

大型連休の頃に
だいたい色の花が咲く

このすき間
からタネが
パラパラと
こぼれる

果実は
ヒナゲシ
(ポピー)
よりも細長い

秋に発芽し
ロゼットで
冬越する

環境が悪いと
小さな姿のまま
花を咲かせる

砂のように細かいタネが
ぎっしり詰まっている

アブラナ科 ナズナ属

ナズナ(薺)

Capsella bursa-pastoris (L.) Medik.

自生環境

道ばた、畑地、野原 など

原産地

日本在来

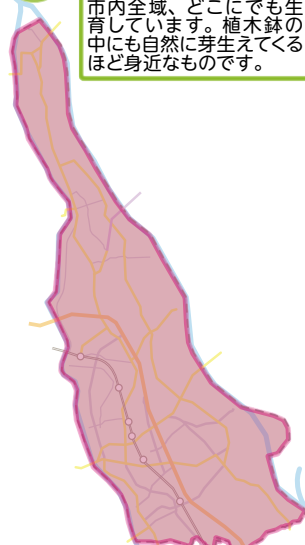
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでも生育しています。植木鉢の中にも自然に芽生えてくるほど身近なものです。



特徴

- ☆ 特に畑地環境に多く見られる1～越年草です。「ぺんぺん草も生えない」という言葉があるほど、どこにでもよく生え、とても丈夫な草です。茎や葉は食用になり、春の七草として七草がゆにも入られます。
- ☆ 秋に発芽してロゼットの状態で越冬、春になると花を咲かせながら茎が伸びて果実の穂をつくり、梅雨入り前にはタネを落として枯れるというのが、教科書的なライフサイクルです。しかし、実際には季節にあまり関係なく、開花結実が見られます。
- ☆ 果実はハート形で、古くはこれを三味線のばちに見立てたため「ぺんぺん草」の愛称がつけられています。果実の穂を取って、柄を引っ張ってから耳元で振るとシャラシャラと音がします。

外来種のホソミナズナ

ナズナは日本にとどまらず、温帯地域に広く分布する種類です。日本のナズナは、果実の幅と長さがだいたい同じくらいで、正三角形に近い形をしています。一方、ヨーロッパなどでは、果実が明らかに細長い二等辺三角形のホソミナズナと呼ばれる変種が主流と言われています。ホソミナズナは国内でも発見されており、野田市内でも、ていねいに探すと時折見られます。

葉の形の変化例



ロゼット・・・植物が冬を越すため、地面にべったり張りつくように葉を広げる形のこと。太陽の光をたっぷり浴び、冷たい風を避けることができる。

アブラナ科 アブラナ属

ナノハナの仲間 (菜の花)

Brassica spp.

自生環境

土手、畑地、道ばた など

原産地

ヨーロッパ

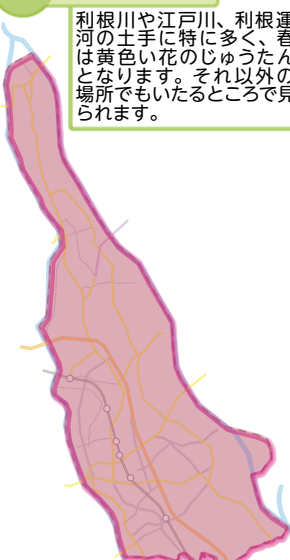
予想される被害



春に黄色い花畑となり美しいのですが、他の植物の生育場所はなくなってしまいます。また、根が堤防を弱くする原因になるとして、防災上の問題も指摘されています。

市内の分布状況

利根川や江戸川、利根運河の土手に特に多く、春は黄色い花のじゅうたんとなります。それ以外の場所でもいたるところで見られます。



特徴

☆ アブラナ科アブラナ属に分類される植物のうち、黄色い花を咲かせるいくつかの種類をまとめて「菜の花」と言います。ヨーロッパ～ユーラシア大陸に広く分布するもので、古くから栽培され、世界中でさまざまな品種が作り出されています。

☆ 「菜の花」と呼ばれるものの代表種はアブラナとセイヨウアブラナです。アブラナは国内でも古くから栽培されているものです。カブや野沢菜、漬け菜などはアブラナ系品種です。一方のセイヨウアブラナは、明治時代にヨーロッパから導入されたものです。つばみ菜、のらぼう菜がセイヨウアブラナ系品種です。

☆ 土手などで野生化している「菜の花」は、冬に根が大きく膨らんでカブのようになります。春の開花結実に向けて養分を貯えたものですが、残念ながら硬くて食べられません。

土手の菜の花の正体は？

川の土手にたくさん生えている「菜の花」は、今までセイヨウアブラナという種類だろうと考えられてきました。ところが、遺伝子解析を用いた新しい研究では、これらの大半はセイヨウアブラナではなく、アブラナだったという結果が出ているようです。利根川や江戸川の土手に生えているものも、もしかしたらアブラナかもしれません。今後の研究が楽しみです。

花びらは4枚で
十の字の形につく

この中に
小さなタネが
たくさん
入っている

葉の根元は
茎を少し抱く

花の後に
棒のような果実が
穂になってつく

葉は厚みがあって
明るい青緑色～黄緑色

冬の根は
カブのように
太くなる

ヒガンバナ科 ネギ属

ニラ(菰)

Allium tuberosum Rottler ex Spreng.

自生環境

道ばた、野原 など

原産地

東アジア など

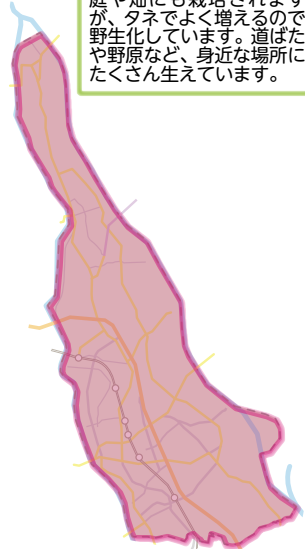
予想される被害



タネでよく増えるため、各地で野生化しています。繁殖力がとても強いので、あまり増えすぎると、同じような環境に生える他の植物の生育場所を奪ってしまう可能性があります。

市内の分布状況

庭や畑にも栽培されますが、タネでよく増えるので野生化しています。道ばたや野原など、身近な場所にたくさん生えています。



特徴

- ☆ 独特な香りが特徴の緑黄色野菜です。畑や家庭菜園などで栽培されますが、道ばたや野原などにも野生のものがたくさん生えています。
- ☆ 8～9月頃に白い花をたくさん咲かせ、なかなか美しいものです。セセリチョウの仲間、タテハチョウの仲間、ハナムグリの仲間、ハナアブの仲間など、多くの昆虫が蜜や花粉を求めてやってくるため、昆虫観察にも最適です。
- ☆ 野生株を山菜感覚で利用することも可能ですが、スイセンやヒガンバナ、タマスダレなど有毒植物との誤食事故が後を絶ちません。摘むときは葉の香りをしっかり確認し、自信がないときは手を出さないようにしてください。

有名だけど謎多き植物

栄養たっぷりの野菜として、食卓でもおなじみのニラ。庭や畑の隅にもよく植えられています。さらに、古事記にも登場するような歴史ある植物ですが、実は真の原産地ははっきりと分かっていません。一説には、日本を含めた東アジア地域周辺が原産とする説もあり、実際に日本の野辺にもたくさん生えています。ただ、これが真の自生なのか栽培株の野生化なのかは、やっぱり不明です。

白い花が丸く
集まってつく



葉は深緑色で
独特の香りがある



花後はぎっしりと
果実ができる

1つの花の
花弁は6枚



果実が熟すと割れて中から
黒いタネがこぼれる

アヤメ科 ニワゼキショウ属

ニワゼキショウ (庭石菖)

Sisyrinchium rosulatum E.P.Bicknell

自生環境

道ばた、公園、土手 など

原産地

北アメリカ

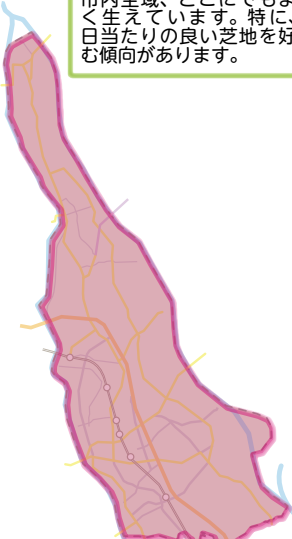
予想される被害



今のところ重大な影響は考えにくいですが、芝生を管理する上で問題が発生する可能性があります。また、芝地を好む他の植物の生育場所を奪う可能性があります。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく生えています。特に、日当たりの良い芝地を好む傾向があります。



特徴

- ☆ 日本に渡来したのは明治時代です。群生すると花がきれいなため、かつては栽培されました。こぼれたタネでよく増えるため、今は野生化して身近な場所でよく見られるようになっています。特に、日当たりの良い芝生内に多く見られます。
- ☆ 1つの花の寿命は1日で、午前10時頃から開き始め、日が傾いてくると早々にしぼんでしまいます。花色は薄い紫色で、紫色の縦線が何本も入ります。ときに白い花をつける株もありますが、これにも紫色の縦線が入ります。紫色花、白色花ともに、花の中心付近は黄色です。
- ☆ 古くはナンキンアヤメとも呼ばれました。また、英語ではブルーアイド・グラス (青い目の草) と言います。

白い花を咲かせる株

ニワゼキショウの白花株は、分類学上、花色違いの品種としての名前はつけられていません。実はこの2つの花色は品種として固定されたものではなく、メンデルの法則に則って出現することが分かったためです。つまり、紫花と白花を交配すると、子の世代はすべて白花となり、子どうしを交配させた孫の世代は紫花：白花がおおむね1：3の比率で出現すると言われます。

通常の花



白っぽい花



太陽の光を浴びて
いっせいに花開く

花を横から見ると
中心付近は
筒状になっている



果実は球形で
中にタネが
入っている

葉は剣形で
先がとがる

株元は
平べったい



マメ科 ヌスビトハギ属

ヌスビトハギ (盗人萩)

Desmodium oxyphyllum DC.

自生環境

林内、林縁、草地

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



林の周りに生える植物なので、伐採や土地改変、ササ等の繁茂が進むと消滅してしまうおそれがあります。また、林の縁や林道沿いの過度な除草も、数を減らす要因となります。

特徴

- ☆ 林とその周辺に生えますが、自然が残されたような場所を選ぶ傾向があり、住宅地や街中にはあまり見られません。マメ科の多年草で、草丈は 1m 前後になり、夏から秋にかけて花の穂を何本も伸ばします。
- ☆ 花後にできる果実は、まるでサングラスのような形をしています。中のタネが熟すとくびれた部分がはずれ、1 つずつ分離します。果実の表面には先がかぎ爪になった微細な毛がびっしりと生えていて、触るとべたべたして動物の毛や服によくくっつきます。
- ☆ 名前の由来は、まるで泥棒がとりつくかのごとく果実がくっつくことから、または果実の形がつま先でそろそろと歩く盗人の足跡のように見えることからなど、いくつかの説があります。

市内の分布状況

マップに示すのは代表的な自生地です。これ以外の場所でも、林の周辺で見つけることができます。



果実がくっつく仕組み

ヌスビトハギの果実は触るとべたべたしていますが、特にべたべたする物質を出しているわけではありません。果実の表面には、肉眼では見えにくい小さい刺がびっしりと生えていて、その先端がかぎ爪になっています。このかぎ爪が肌に引っかかるために、べたべたするよう感じられるのです。ヌスビトハギの果実を入手する機会があったら、ルーペなどで表面を観察してみましょう。



葉は 3 枚組
茎の上の
ほうまでつく



1 つ 1 つの花は ちょうけい か
マメ科植物特有の蝶形花



果実は
くびれて
サングラス
のような
形になる

ラン科 ネジバナ属

ネジバナ (振花)

Spiranthes sinensis (Pers.) Ames

自生環境

芝地、公園、林縁 など

原産地

日本在来

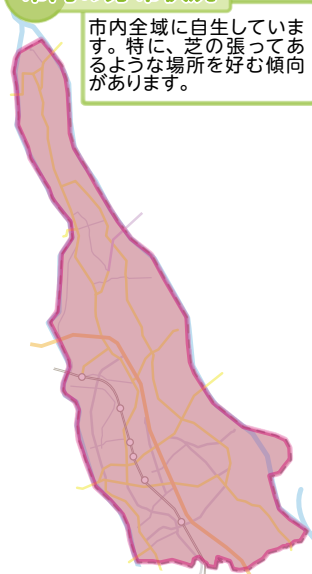
生育を脅かす要因

今のところ特になし

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域に自生しています。特に、芝の張ってあるような場所を好む傾向があります。



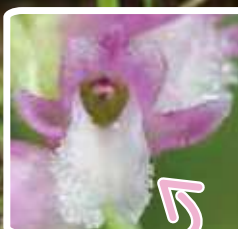
特徴

- ☆ とても身近な場所に咲くランです。公園の芝生広場や、里山の林縁などで見られます。特に、芝生の張ってある日当たりの良い乾いた場所が大好きで、そのような環境下では、一面の群生となることもあります。
- ☆ 花期は6～7月頃で、赤紫色の花が螺旋(らせん)状について、まるで花の穂がねじれているかのようです。名前の由来はそこから来ています。花色の濃淡は株によって異なり、まれに純白の花をつけるシロバナモジズリも見られます。
- ☆ モジズリ(振摺)の別名もありますが、これは花のつきかたが織物の一種、振摺の乱れた模様を連想させることから来ていると言われます。

穂のねじれかた

ネジバナの穂のねじれかたは、株によってずいぶん異なります。巻く方向は特に決まっておらず、左巻き、右巻き両方ともに存在します。また、巻きの強さもさまざまで、時にほとんど巻かずに一直線に並ぶものも見られます。ネジバナを見つけたら、株ごとに見られる個性をいろいろ探して楽しんでみるのも良いかもしれませんね。

花の穂がねじれる



花弁は透き通ってキラキラする

葉は深緑色でやわらかい



ねじれる方向は決まっていない



ねじれの具合もさまざま



バラ科 バラ属

ノイバラ(野茨)

Rosa multiflora Thunb.

自生環境

河川敷、水辺 など

原産地

日本在来

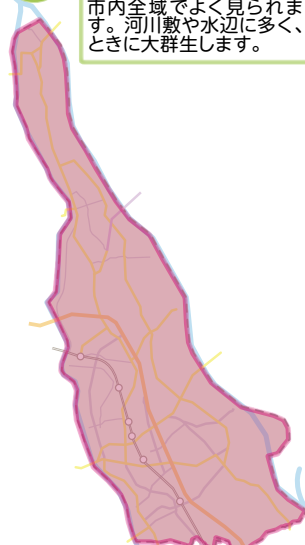
生育を脅かす要因

今のところ特になし

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。河川敷や水辺に多く、ときに大群生します。



特徴

- ☆ 河川敷や水辺によく見られる落葉低木です。地下茎を張り巡らせてどんどん増えていくため、辺り一面の群生となることもあります。特に、河川敷では「ノイバラ群落」と呼ばれるノイバラを中心とした植生によって構成される環境も見られます。
- ☆ よく枝分かれをしながら2～3mほどになりますが、枝はそれほど太くないため、成長とともに次第にしなだれていきます。もたれかかったり、地をはうように伸びたりすることもしばしばです。枝には鋭い刺があり、うかつに触ると痛い思いをします。
- ☆ 初夏に直径 2cm ほどの白い花を多数咲かせ、最盛期には辺り一面バラの香りが漂います。訪花昆虫にも人気が高く、ハナムグリやチョウ、ハチの仲間などさまざまな昆虫を見ることができます。秋～冬に小さな丸い赤い果実ができます。

果実は食べられるの？

バラの果実はローズヒップと呼ばれ、品種によっては、ジャムやハーブティー、果実酒などに利用されます。では、ノイバラの果実は食べられるのでしょうか。答えは「はい」です。霜に当たると甘みが増して生食も可能です。ただ、エイジツ（営実）という名前で生薬としても利用されており、その用途は下剤です。そのため、せいぜい軽く味を見る程度にして、多食しないことをオススメします。

花びらは
白色で5枚



葉わきに
隠れる
ように
刺がある



冬に葉が落ちた後も
赤い果実は目立つ



河川敷のノイバラ群落
陰しい「いばらの道」だが
花の時期になると
辺りはバラの香りに包まれる



ウラボシ科 ノキシノブ属

ノキシノブ (軒忍)

Lepisorus thunbergianus (Kaulf.) Ching

自生環境

古木の幹、岩場、石垣 など

原産地

日本在来

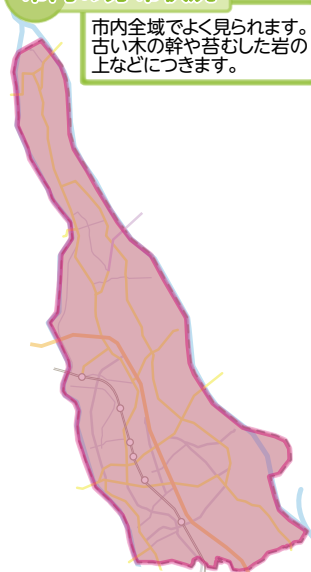
生育を脅かす要因



よく見られるシダ植物ですが、ノキシノブの好む古木は、伐採の対象にされやすい傾向があります。また、都市化によって空中湿度が下がると、葉が傷んで衰弱する原因になります。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。古い木の幹や苔むした岩の上などに付きます。

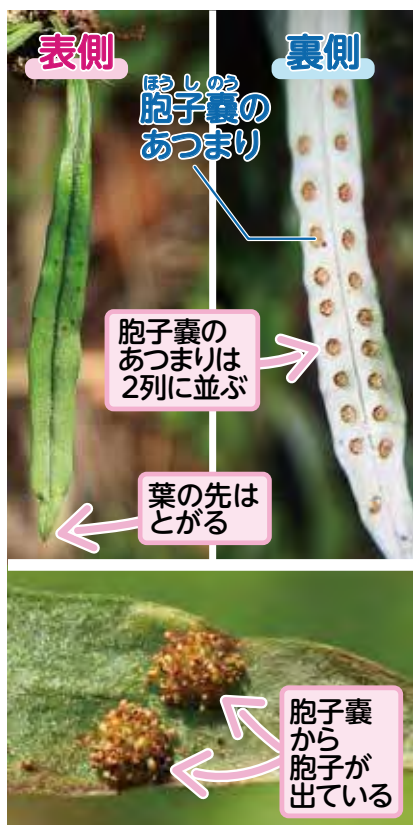


特徴

- ☆ やや湿った場所によく見られる常緑のシダです。名前に軒とあるのは、かつては民家の軒先などによく生えたことから来ていますが、住宅事情が変わった現在は、軒先ではまず見かけなくなりました。今は、コケや地衣類が多く生えていて湿っているような木の幹や岩壁などでよく見かけます。
- ☆ 根茎は 3mm ほどで、幹などについて横にはうように伸びていきます。葉は先がとがった線形で、長さは 5～20cm、幅は 5～10mm ほどです。
- ☆ シダ植物なので花は咲かずに種子もできません。代わりに、葉の裏に胞子嚢ができ、そこから胞子を飛ばして増えていきます。いくつもの「丸く集まった胞子嚢」が、2列に並んでつきます。これを目に見立てた、ヤツメランという別名もあります。

樹木に悪さはしない

ノキシノブは幹によくつくため、「木に影響はないのか?」という質問をよくいただきます。答えから先に言うと、「木に影響はないのでそのまま大丈夫」です。ノキシノブのような植物を着生植物と言い、単に根を下ろす場所を借りているだけです。もちろん木から水や養分を横取りすることはない、すべて自力で確保しています。シダ植物には、着生植物の性質を持つものが多く見られます。



キク科 ノゲシ属

ノゲシ(野罌粟)

Sonchus oleraceus L.

自生環境

道ばた、畑地、野原 など

原産地

日本在来

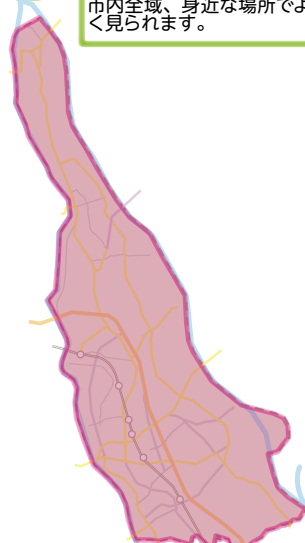
生育を脅かす要因

今のところ特になし

市内全域にでよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に育つ野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、身近な場所でもよく見られます。



特徴

- ☆日本のみならず世界中に分布する、いわゆる「コスモポリタン種」です。市街地から山地まで環境を問わずに、どこにでもよく見られます。草丈は1～2mほどになります。
- ☆同じキク科のアキノノゲシに対して、春に花が目立つことから「ハレノゲシ」とも呼ばれます。ただ、ノゲシは周年開花性が強く、季節に関係なく1年中花を咲かせ、タネを飛ばしています。タネには綿毛がついていて、風であちこちに運ばれていきます。
- ☆同じ仲間のオニノゲシとの間にアイノゲシと言う雑種をつくることがあります。アイノゲシは両者の中間的な姿で、タネはできません。それとは別に、近年は、市街地を中心に葉の切れ込みが細かく複雑な形をしたタイプのノゲシが増えてきています。こちらはアイノゲシとは異なり、きちんと結実します。

白い花のノゲシが増加中

ノゲシの花は通常黄色ですが、ときどき白っぽい花を咲かせる株が見られます。これにはウスジロノゲシの名前がつけられており、ノゲシの花色違いの品種です。ただ、純白とはならず、中心付近の舌状花(ぜつじょうか)は黄色っぽい色となる傾向があります。かつては珍しく、図鑑にもまず載らないものでしたが、なぜか2000年代に入ってから急増。今では普通に見られるようになりました。



小さなタンポポのような花を開く

葉はやわらかく触ってもあまり痛くない

寒さが厳しいときはロゼットになって冬越しすることも



開花時 花後

総苞

花が終わると総苞は下膨れになる

タネが熟すと綿帽子を開く

タネは細かい横しわでびっしり



花の裏側に薄い赤紫色のしまがある

花は白っぽい

品種

ウスジロノゲシ

ロゼット・・・植物が冬を越すため、地面にべったり張りつくように葉を広げる形のこと。太陽の光をたっぷり浴び、冷たい風を避けることができる。

アカバナ科 アカバナ属

ノダアカバナ (野田赤花)

Epilobium coloratum Biehler

自生環境

湿地、水辺、休耕田 など

原産地

北アメリカ

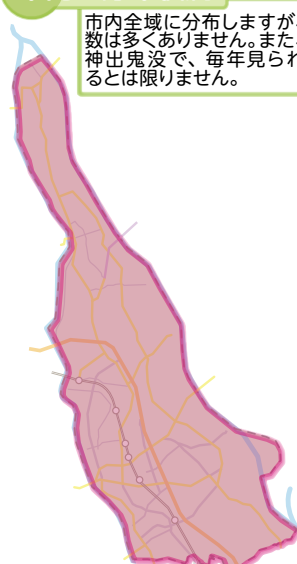
予想される被害

今のところ特になし

かなり前から定着しているようですが、現時点では生態系に悪影響を及ぼすほど繁殖している様子はありません。引き続き、今後の動向を見守る必要があります。

市内の分布状況

市内全域に分布しますが、数は多くありません。また、神出鬼没で、毎年見られるとは限りません。



特徴

- ★最初に野田市で発見されたことからノダアカバナと名がつけました。長らくカラフトアカバナという既知の種類と同じだとする説が有力でしたが、最近、北アメリカに自生する *Epilobium coloratum* という別の種類だということが判明したようです。
- ★休耕田などの湿った場所に生え、草丈が 1m 近くにもなる多年草です。茎の上のほう細かく枝分かれして、夏から秋にかけて小さな花を多数咲かせます。咲き始めは白色ですが、時間とともに赤みがかり、咲き終わる頃にはピンク色になります。
- ★果実は細長い棒のような形をしています。成熟すると裂けて、中から綿毛つきのタネが顔を出し、風とともに遠くに飛ばされていきます。綿毛は白ではなく、まるで銅のように赤茶色です。

ついに正体判明か

ノダアカバナは野田市で最初に発見されたことにちなむ「野田の地名入り植物」です。昔からありましたが、正体ははっきりせず、カラフトアカバナという種類と同じとされてきました。ところが神奈川県植物誌2018によると、カラフトアカバナではなく、北アメリカに自生する別の種類だということが判明。これに対する日本名はないため、今後ノダアカバナという名前と呼ばれる可能性大です。

